で無い貨物をシベリア線で送り得る。――シベリア線の西行は空車で、今迄これにソ聯が對米輸入品を積載してゐたが、米國の對ソ輸出が禁止せられゝば、日本品を積める筈である。

第二次大戰より受くる經濟上の惡影響は先づ交戰國よりの金屬工業原料や機械の輸入杜絶である。英佛からは殆ど絶對に輸入不可能であり、ドイツからの輸入は、上記の如く英國に除外例を認めしめるとしても、ドイツ自體が軍需品生産に追はれる限り、減退せざるを得ないことは、既に十一月末迄の貿易統計が明確に指示してゐる。米國品が對英佛輸出に集中される限り、それの對日輸出は減少するわけだが、せめて對ソ輸出たるべき分はこちらに獲得すべきである。

又印度、蘭印、マレー、佛印、比島等とは巧妙なるバーター協定によつて、必要物資の輸入に努むべきである。世界的政治不安の際之等の諸國が、我國の反感を敢えて買ふが如き態度を採り得ないであらう。現にオーストラリアは三十萬俵の羊毛對日輸出を承認した。而して通商外交は政府間の交渉の外に、民間同志の圓滑なる下交渉がくれ〴〵も必要である。

それにしても、この際第三國を當てにすることは危險であるから、何といつても東亞資源の開發と生産力擴充をいそがねばならぬ。國内的に勞力、水、石炭、電力、その他燃料、動力、輸送力等々の不足、物價騰貴等々の惡條件が重つてゐるが、當局に於ける、重點主義に基く巧妙なる計畫及統制と、民間の愛國心に基く協力によつてこの難關を切拔けねばならぬ。如何なる計畫、統制經濟も民間の愛國心なくしては決して成功するものではない。

(三) 況んや第二次大戰後はソ聯と米國とが國力の比重を增大して、東亞に進出して來ることは火を堵るよりも瞭かであるから、如上の努力が緊要事である。ドイツはソ聯よりの輸入代金を精密武器や機械を以て支拂ふ外になほ足りない部分は技術輸出を以て補ふに相違ない。即ち既に新聞に報道せられた如く數十名の優秀技師がソ聯に入り込んで、鑛山、

油田、工場、鐵道等の改良を計つてゐるから、ソ聯の生産力は大いに擴大し、その製品は優秀品となつて、五ケ年計畫の缺點を補正するであらう。

又米國は既に十三億ドルの海軍擴充を始め十八億ドルの陸空軍擴張に乘出しつゝあるが、米國のことであるから世界情勢の變轉に伴うていくらでもこれが資金を增加するに相違ない。

而してソ米ともに大戰に捲込まれるとするも、決して致命傷を受けるほど深入りせず、自己の生命力の保存增大を計ることに努めることは明らかである。從つて我國は第一次大戰後のワシントン體制及びコミンテルン體制の攻擊の如きを再び受くることなきやう決心してゐなければならぬ。

三

支那大陸に於ては事態は我國にとつて好轉しつゝある。卽ち皇軍による北海、南寧の占領は蔣政府への最後の輸血路を遮斷したので、彼等は益々營養不良に陷りつゝある——滇越、滇緬兩鐵道がなほ輸血路として殘つてゐるが、いづれも大した輸送力が無いらしい。加ふるに中國共產黨の蔣政府に對するヘゲモニーの要求は、國共分裂の危機をますます增大しつゝある。ソ聯が西北支那に特別地區を建設しつゝあることは警戒を要するが、我國も邊境建設工作をいそいでこれを境外に封じ込むべきである。

これに對して新支那に於て新中央政府が今や將に生れんとしつゝあり、我國はこれと互助提携して、一刻も早く東亞新秩序の建設を急がねばならぬ。

——昭和十五年一月稿——

二　東亞協同體と反共政策

一

かういふ出題に對して、書齋人のいひ得ることは大さつぱなことで、細かいことはそれぞれの專門家に俟たねばならない。又筆者の言ひ得ることは、その思想工作に關してゞあるが、宙に浮いた思想工作は甚だ力の弱いものであるから、それよりも先に軍事工作と經濟工作が進行しなければならないことはいふ迄もない。

今やソ軍及それに踊らされる支那軍は、朝鮮、滿洲、內蒙、北支、中支、南支を包圍して蜿々一萬キロの陣營を築き、此の圈內には遊擊軍が漸次衰滅しつゝありとはいへ、尙跳梁してゐる。玆に於て東亞新秩序にとつて何よりも急を要することは、防禦的攻擊態勢を完成することである。これはいふ迄もないことではあるが、尙我國の弱いインテリの道德心が滿足せぬ樣子があるので、むしろ强靱な武力の下に始めて、道德も人道主義もが實行されるものなることを事實を以て示す必要がある。

皇軍が旣に百五十萬方粁以上（之に廣東及海南島を加ふ）地域を占據せることは旣成事實であり、而して此圈內の民衆が皇軍の永久駐屯を願つてゐるのも旣成事實である——もし撤退すると其跡に支那軍が來て彼等を苦しめるので我軍が駐屯することが卽ち之以上流血の慘を見ざること、道德、人道、平和、樂業が可能なること、が旣成事實となつたのである。やがて新支那政府との間に防共協定が出來るやうになれば、該政府の請によりて駐兵することになるであらう。之をしも武力占領といふ列强は、永遠に東洋の紛糾を願ひ、其間隙につけ入らんとする彼等の野心を曝露するの外の何ものでもない。

經濟工作を進めることは駐屯軍の現地調辨に役立つと共に、住民に職業を與へ、その生

活に安定を齎らし、相共に反共の一策となる。埋藏量一億瓲といはれる內蒙の龍烟鐵鑛は、一部は我國に輸入されてゐるが、他の一部は北京郊外の石景山製鐵所で精煉せられ製品は既に市販せられてゐる。此處にもつと加工々場を增して軍需品其他の重工業品をどし〳〵增產すると好い。此處へなら河北省の石炭も山西省の石炭もさう遠くはない。千三百億瓲といはれる山西の石炭は現場に於ても大いに利用されねばならぬ。燃料用、發電用はもとより、石炭液化用に、化學工業用に、石炭が採掘され、加工精製されて撫順や三池のやうな石炭都市が出來ると、人口三十萬を養ふことが出來るが、かういふ小都市をどん〳〵作つて行くべきである。滿洲では新たに阜新炭坑を中心に之を作るさうだ。又東邊道に發見された二十億瓲の鐵鑛も既に開發利用に着手されてゐる。朝鮮茂山の鐵鑛も淸津の三菱製鐵所で處理されることになつた。

二

中支では蕪湖界隈から大冶にかけて鐵の富鑛があり、支那軍が大分壞して逃げたが、早く修理して、一部は從來の如く若松へ持つて來、他の一部は漢冶萍廠で精製される。漢陽の製鐵所で大冶の鐵鑛と萍鄕の石炭とを以て鐵鋼を作り、悠に中支の所要に應じられねばならぬ。此所にも一大重工業都市が出來る筈である。揚子江の北岸にある炭山も大いに開發されねばならぬ。——一大炭坑都市が出來るぐらいに。內地の砂鐵の利用、セメント製造用の廻轉爐の利用が、もつと發達すればブロック內の鐵の自給が可能になる——石炭はもとより。

棉花は北支では一千萬擔、中支でも一千萬擔の增產計畫が建てられたが、着々實現の步を進めねばならぬ——今迄遊擊共匪が大分棉作やその出廻りを妨害してゐたが、十四年初よりの剿匪で餘程影を沒したであらう。一體農業國である支那が、尙棉花や小麥を大量に輸入しなければならなかつたのは間違ひであつた。之は支那を喰ひ物にしてゐたイギリスは印度棉が打擊を受け、アメリカ米棉が打擊を受けることを恐れたから、敢て支那人の棉

麥作を妨害しない迄も、之に對して冷淡であつたからである。彼等は支那のパトロンのやうなゼスチュアをして支那人の甘心を得ることに努めてゐるが、其實は支那から自己に取つて必要なものを搾取する丈で、少しも支那人の親身になつてやるやうなことはないのである。これら諸列强の買辨であつた支那政府も、敢て白人の意を受けたとは言へない迄も、人民の福祉に對しては頗る冷淡であつた。政治は人民の爲のものではなくて、政治家階級の爲のものであつた。今や新政府が新民主義によつて民衆の爲の誠の政治を行ふに際しては、我國民は白人とは違つて親身になつて顧問とならねばならぬ。

北支土壤は棉花に對してまだ處女地なので、反當り收穫はアメリカよりも多いし、又採算上他の農作物よりも有利だから、指導さへ好ければ大いに增產し得る可能性がある。支那事變直前頃の「ダイヤモンド」誌に載つてゐた山東の某在華紡の重役の言によると、支那の棉作技術の指導方針も誤つてゐる――卽ち彼等はアメリカの農科大學の留學生上りが多く、アメリカ共儘の方法を支那で再現せんとしてゐるが、本當は支那の風土や農民の個性に適した方法を採らねばならない。アメリカ南部の砂地と北支の黃土地との相違や、砂地の地下水と灌漑用水との相違や、雨量害虫等の相違等々。支那技師が白人の使ふ大きな鐵の鎌を體の小さい支那農民に使はせようとする事などは、三民主義やマルキシズム等の思想問題に於けると同じく、支那人の歐米崇拜禍の悲劇であらう。面白いことには技師が經營してゐる模範農場の棉作よりも、農民が勝手にやつた棉作の方が出來が好いといふことだ。

北支棉收穫の記錄は五百萬擔ぐらゐだから、日本技師が個性的方法によつて指導すれば、之を倍加し得る可能性はあるのである。然し年數のかゝることであるから急に第三國からの棉花輸入が激減することはない。十三年度で激減したのは、第三國の日本棉布輸入が激減したからであつて、第三國がわが棉布を買ふ限り、比例的に棉花を輸入するのである――十三年でさへ木綿貿易は數千萬圓の出超であつた。但日滿支ブロック內消費用の綿布、綿製品製造に必要なだけの棉花は、大急ぎで自給できるやうにしなければならぬ。

內蒙の羊毛は今迄絨氈用に、主として米國へ輸出されてゐたのであるが、被服に用ひられるやうに技術の發明を急がねばならぬ。

其他日滿支ブロック內に於ける、鹽、砂糖、小麥の增產や、交通、金融、企業組織等の經濟問題に就いて多くのことを言はねばならぬが玆には省略する——目下まだ發表を許されぬ企畫院の數字が公開せられる時に、いづれ再說しなければならない。兎も角も東亞協同體に於ける經濟的安定其れ自體が一の反共政策なのである。

三

反共政策の一部門としての思想對策に於ては、何よりも先づマルキシズムの批判暴露が第一であらう。

マルキシズムは現資本主義制度が沒落して、無產者の共產主義的自由王國が實現するといふ公式的豫言を宣傳することによつて、各國の勞農インテリ階級をして其國家に反抗せしめ、其國のヘゲモニーを握らんとするものであるが、かゝる宣傳本部たるコミンテルンが存在する當のソ聯に於て、此の豫言は實現せられず——恰度國際聯盟の本部のあるスキスがその制裁條項より脫退して聯盟主義に逆行せるやうに逆に勞農者の監獄が實現しつゝあることを指摘すれば好い。

歐洲大戰直後、コミンテルンがモスクワに設立された頃には、獨、伊、墺洪、土——否英國に於てすら革命的擾亂が起つたが、やがていづれの國も國家主義と統制資本主義に逆轉して了ひ、就中伊のファシズム獨のナチズムは强大なる反共勢力となり、日本主義と相結んで、赤ソ包圍態勢が出來上つた——此中オーストリアとチェッコの一部は政治的にドイツに併合され、ハンガリーと滿洲國は防共協定に參加し、スペインは反共勢力たるフランコ軍が共產軍を打倒して中央政府を樹立し、支那でも廣大且つ重要なる地域に反共親日政府が出來上りつゝある。世界に於て今尙コミンテルン乃至ソ聯邦の使唆に動されてゐるのは四川省の山奧に逃竄せる、一邊疆勢力たる蔣政權のみであるが、それも親ソ派と英米

派と和平派に分裂して、日和見的動搖に陷つてゐるのである。

ドイツの擡頭に極度の恐怖に陷つて、ソ聯を國際聯盟に抱き込み、相互援助條約をすら締結したフランスでさへ、チェッコ問題の際に於けるソ聯の無力を見拔いて、勝手に四國協約を結んで、是等援助條約の相手たるチェッコを見殺しにした。そのフランスもコミンテルンの人民戰線術に踊らされて國を弱體化し、今や英米の保護國のやうになつて了つた。かくてソ聯は全然國際的の孤立に陷つて了つた。

最近黑海協約を結んでドイツに對抗しようと、ルーマニア、ブルガリア、ユーゴー・スラヴィア、トルコ等に呼びかけたが、之等の諸國はソ聯には見向きもしないで、獨自のバルカン四國協定を結んだ(但ブルガリアを除きギリシアを加ふ)。又最近伊ソ・バーター協定が成立したが、之に政治的意味があるかの如くソ聯が宣傳しても、世界の何人も耳を藉さないであらう。成程スペインから赤色勢力を驅逐されて了つたけれども、イタリアは尙フランスに向つてチュニス、コルシカ、スエズ運河への參加權、ヂブチ港、アヂス・アベパ鐵道等を要求し、又佛との軍事同盟を發表した英國に對抗する限り、日獨防共協定に參加してゐなければならないからである。抑もソ聯との平和的通商を拒む國は無い。獨りイタリーのみならず、ドイツでも日本でも、有無相通の經濟交渉を嫌ふものではない。ソ聯はそのマルキシズムの宣傳や他國への干涉政策を棄てゝ、有り餘れるものを賣り、足らぬものを買つてはどうか。その汲々たる鎖國政策を止めて、世界經濟圈の一環となつてはどうか。特に我國に對しては、漁業權や樺太の石炭石油採掘權を尊重し、之より收得する收入を以て、我國の良質安價の製品を買つて、ソ聯民衆の生活を潤はしてはどうか。ソ聯の民衆生活に關する多くの惡評を信じないとするも、ソ聯崇拜者であつたジイドの「ソ聯紀行」及其「修正」を虛僞なりと言ひ得ないであらう。今やソ聯內に於けるマルキシズムの公式と實際史との齟齬を抉摘する必要がある。

四

マルキストは「無產者の共產的自由王國」を唱へて、ロシアの革命を成就せしめたが、革命後の强制經濟、徵發財政に對して農民の叛亂が起ると、直ちに或程度の資本主義を許容する新經濟政策を採らねばならなくなつた（一九二一年）。然しかくすれば有產階級が發生することは當然であるから、一國社會主義及五ケ年計畫採用（一九二八年）以後は、慘酷に中小企業家、中小商人、富農――彼等の責任でもないのに――を撲滅しなければならなかつた――特にこの富農撲滅は歷史上の最大の殘虐行爲であつたと言はれる。かくて商工業及金融業、交通業等は全部國營となり、農業も國營農業及統制農業（コルホーズ）となつたが、先づ國營官營事業の能率が上らないので、玆に第二の肅淸工作が始まつた――官吏の怠慢に對する嚴罰である。

抑も官業なるものは、特殊の業務を除くの外は、大抵失敗に歸することは各國の歷史に徵して明らかであるが、ソ聯に於ては其上に尙特別の事情が加つて失敗を早からしめた。卽ち各國の官吏は、殆んど凡て實際事業經營の經驗者か、或は技術及國務の敎育を受けた者であるが、ソ聯の官吏は事業經營とか國務とかに何等の經驗を有せず、階級意識は有するが國家意識は有せぬ所の、勞農民が革命の際の功勞によつて成り上つたのであるから、思ひ切つた改革は可能であつた代りに、實際の經營は不可能だつたのである――ロシア革命の際インテリを打倒したのは一大失敗であつたと言はれる。そこで獨米英佛の技師や企業家を高級を以て迎へて敎育を受けたのであるが――汽車に就いては我國の技師を迎へ、一時「ヤポニザーチヤ」が標語となつた――然し技術及經營の方は短年月を以て體得し得るものではない。敎師が歸國して了ふと、相變らず能率が上らぬか、齟齬破損を來たして、計畫通りに進行しない――生產の%は增えても、實數は或は大して殖えず、或は實數は無理矢理に殖えても、品質が劣等であつて、民衆の不平は依然として絕えない。玆に於て最高當局は、責を所管官吏の責に歸し、之を處罰することによつて、民衆の眼を眩まさゞるを得なくなる。

以上は技術とか才能とかに於けるソ聯官吏の缺陷と官營事業失敗の原因であるが、其外

にソ聯官吏の性質一般に於ける缺陷がある。一體ロシアの官僚の横暴は帝政時代からの名物であり、トルストイの小説等に巧みに描かれてゐるが、況んや今や一介の勞働者や農民が成り上つたのであるから、その暴力と、一般民衆の怨嗟や普通の勞農民の嫉妬は察するに餘りがあり、之は又民心を萎縮せしめて、怠業に導く。

特に外國貿易の減退の原因の一に此の官僚主義を數へることが出來やう。凡そ商賣は前垂掛たることを要するが、殊に國民的風習を異にする外國貿易に於ては、相手方の國情を察して物軟かく商談を進めねばならぬものであるのに、ソ聯の官營貿易では出張官吏が一に本國政府の訓令を楯に横車を押さうとするのであるから、うまく行く筈が無い——靜岡茶の買附に於けるが如く。ソ聯政府は近頃自給自足が成功したので貿易を必要とせずと宣傳してゐるが、それは虚言で、最初の頃は資本の利潤を加算せざるソ聯商品が、世界市場を席捲して、資本主義國の沒落を早めるであらうと、脅威してゐたのである。然るに大いに進出せずして鎖國してゐるのは、國内に於ける生産が振はない上に、官僚貿易の拙劣にあるといはねばならぬ。或は假裝敵國に必需品を賣らないといふかも知れぬが、此言は最近の伊ソ通商協定と矛盾し、又將に締結せんと望んでゐる獨ソ協定とも矛盾する。或は獨ソは假裝敵ではなくて、日本のみさうだから日本に石油、銑鐵を賣らないと言ふかも知れぬが、然し獨伊へ賣る限り、日本はそれを獨伊から買ひ得るといふ事實と矛盾する。

五

一體資本利潤を無視する共産主義國家財政其者が矛盾に滿ちたものである。資本主義國では——統制資本主義國でも資本家や企業家や地主の利潤慾を活用して企業の能率を擧げしめ、その利潤の中から租税や公債金を取上げることを財政策としてゐるが、かゝる資本家を排した國では、政府自ら利潤を擧げねばならぬ。此際能率が大いに增進するならば好いが、前記の如く非能率であれば、勞働賃銀を低位に置くか、生産物の價格を騰貴せしめて利潤を得るの外はない（コルホーズでは租税重課）。かくてジイド其他の見聞者の報告に

ある通り、蔽ふことを得ざるソ聯の物價騰貴、生活程度の低落と民衆の不平が生じてゐるのである。玆に於て政府が民衆の歡心を買はんとて、樣々の社會施設を設けんとすればするほど、政費が嵩み、從つて物價騰貴を引起さゞるを得ない。かくて民衆の怠業は益々加はるばかりである。

かくて政府は官吏を罰するのみならず、勞農者自身を大量に肅淸しなければならなくなるのである。三八年末には勞働者の國家といはれるソ聯に於て、最も過酷なる勞働振肅令と勞働手帳制度が設けられた。

然るにかゝる矛盾せる高等政策を强行せんが爲には、爲政者の間にも意見の相違が發生するので、最高當局內に於ける衝突が激化する筈である。

先づ最初にレーニンの一國社會主義可能論に反對した、革命の元勳トロツキーは永久世界革命論者として黨籍を剝奪され、次で彼がスターリン・カガノヴイッチの官僚主義に反對するや、反幹部派として國外に追放せられ、此のオツポジシヨンの仲間入りしたジノヴィエフ、カーメネフは後に銃殺せられた。

一九三四年十二月一日に、レーニングラード黨支部書記長でスターリンの後任者と目されてゐたキーロフが暗殺されるや、肅淸は殘虐なテロ政治に發展して來た。前記ジノヴィエフ及カーメネフも此事件に關係があつたもの（「合同本部」事件）として處刑されたが（一九三五—六年）、次いで三七年一月には反革命陰謀の「並行本部」事件なるものが摘發せられて、ピヤタコフ、ソコーリニコフ、ラデック等の高官や新聞主筆が處刑され、同三七年六月には赤軍にも陰謀事件ありとして、トハチェフスキー元帥以下八名の最高軍首腦者が銃殺された。

六

かくの如くに容赦もなく官吏や民衆を處刑する處のゲ・ペ・ウ（內務人民委員部）自身にも反政府陰謀があるといつて、肅淸又肅淸が行はれた。三六年九月內務人民委員ヤーコ

ダが突如として罷免されて、エジョーフが之に代ると、エジョーフはヤーコダを始め、其輩下たるモルチヤノフ、ゴルブ、ガイ、パウチル等の主要人物を全部處刑し、部外でもトロツキー派、ブハーリン派、ルイコフ派を全部檢擧した。然るに十三年末、スターリンと同じジョルヂア人たるベリヤがエジョーフに取つて代るや、エジョーフ派六百名を肅清したといはれる。

かうなると肅清の標準に少しも客觀性が無い。も早や官吏や勞働者の怠慢、意見の相違、陰謀といふやうな標準ではなくて、もつと外のものではないか。

スターリン派が反對派を肅清する派閥爭ひかと思はれるが、然しスターリンに最も忠實だつた幹部や黨員や、共青、コムソモールも肅清せられ、大ロシア愛國主義の故に異人種がやられるのかと思はれるが――ロシア革命の指導者はレーニン、トロツキー以下大部分ユダヤ人で、ロシア革命はユダヤ人のスラーヴ民族征服だといはれたが、その後トロツキー始め多くのユダヤ人が肅清された――然し尙カガノヴィッチ及リトヴィーノフが最高幹部乃至人民委員として殘つてゐる。カガノヴィッチ兄弟が勢力を振つてゐるのは、その妹がスターリンの新妻だから、リトヴィーノフの妻は英人だからだといふやうな憶說も起つて來る。又ベリヤがゲ・ペ・ウ長官になつたのはヂョルヂア主義ではないかとも云はれてゐる。

ソ聯政府が革命後宣言した異民族尊重主義も、額面通りには行はれてゐない。ソ聯人口一億六千萬人は百二種（一說には百八十七種）の異民族の集合體であり、其中七千七百萬の大ロシヤ人が他の異民族を支配してゐるのである。帝政ロシア政府の異民族政策は困難を極めたものであつたが、ソ聯政府は之を民族を基礎とする十一の共和國と數個の自治州に分ち、之等に一種の自治權を認めると宣言し、如何にも民族自決主義を採つたかの如く思はせた。然るに其後は、ウクライナ、白ロシア、ウズベキスタン、キルギース等に於て、其の指導者が「ブルジョア」民族者主義として集團的に銃殺せられ、住民はウクライナから極東へ、極東朝鮮民は中亞へといふ風に、其の生活の根據から放逐されて集團移住を强制

されてゐる。

七

思想としても世界階級主義から、大ロシア愛國主義へ、それから又世界革命主義へ動搖し、その度に舊說の保持者は處刑せられ、歷史上の人物がプロレタリアの敵になつたり、或は祖國の英雄になつたりする。最後はすつかりロシア史を書き直して、スターリン一人の爲す處を目標に、ロシア史は向上して來た——ロシアの歷史哲學はスターリン價値を窮極原理として組織せられたのである。

然しそのスターリンの實行に何等客觀的標準があり得ず、マルキシズムに含まれる矛盾の暴露するに從つて、前後左右に動搖し、動搖するごとにソ聯の有能者乃至革命後二十年の經驗者を抹殺するのであるから、國內は混亂、恐怖に陷り、國力は疲弊し、國際的には孤立に陷らざるを得ないのである。

大體以上の如きことを新支那インテリや民衆に敎へ、そのマルキシズムを放棄し、獨自の東亞思想を建設すべきことを說くべきだと思ふ。

——昭和十四年三月稿——

三　ソ聯の芬蘭進出と世界情勢の變轉

一

ロンドン四〇年一月九日發同盟電報は「獨のオランダ侵入近し」と題して、獨軍最高司令部がレッグリングハウゼン（獨蘭國境より東北六十四粁）に移されたこと、蘭領に突出した獨領クレーヴ地方に重砲陣地が構築されたこと、この重砲はオランダのユトレヒト市に對する有效な砲擊を行ひ得る巨砲なること、北は獨領エムデンより南はアーヘンに至る全獨蘭國境に沿つて、數地點に新飛行基地が建設されたこと等を根據として、英紙デイリー・テレグラフのアムステルダム特派員が、「獨の對蘭侵入が昨年（三九年）十一月當時と同程度に切迫しつゝあり、恐らく二、三週間を出でずして實現される可能性あり」との情報を九日のテレグラフ紙に掲げたのを、飜譯打電して來てゐる。果して之が實現されるか否かは未知數ではあるが、三九年冬來の歐洲戰線の形勢よりして、ドイツが何等かの新手を打つべき必要に迫られつゝあることは想像に難くないし、又最近オランダ政府は武力侵入に對しては、飽くまでも武力反擊を加へると强硬聲明を發したのを見ても、相當に事態が切迫してゐると思はれる。それが原因たる歐洲戰線の形勢とはソ聯の對芬侵入であり、同時に英佛米等の對芬援助態勢である。

ソ聯が最もコンディシヨンの悪い冬季を選んでまで對芬戰に焦つた理由は、最近の米、伊、教皇等の勸說により、英佛獨間に案外早く――二月頃に和平が來さうな樣子もあり、その際に結成さるべき反ソ戰線に對抗せんが爲であるといはれてゐる。もしかゝる反ソ戰線が結成されるとすれば、その前衞となるべき國はいふ迄もなくドイツであるからソ聯の對芬侵入は、ドイツに對する防禦線の建設にあることは、ソ聯のポーランド分割沿バルト

三國制覇の意圖よりして、首肯し得る。してみると、ドイツも安閑としてソ聯の對芬攻略を見送るわけには行かず、之に釣られて對ソ防備線を擴張しなければならない。即ちソ聯がフインランドからスエーデン、ノルウエーへと、ドイツの北邊を西へ伸びるのに對してドイツはその南側を西へ、オランダ、デンマークへと伸びざるを得ないのであると考へられる。のみならずドイツがオランダに對英攻撃の基地を得る時には、飛行機のガソリン消費を半減し得るのである。

尤も英佛獨の和平が、米、伊、教皇等の勸説にも拘らず、そんなに早く齎らされやうとは思へない。何となれば英佛の和平條件はヒトラー總統の下野と、チェッコ及ポーランドを原狀に歸すこと等にあるが、若しドイツが此の條件を容れるとすれば、何の爲に對波戰を起したのか譯が分らなくなる。之では元も子もなくなるのである。それはドイツが戰敗國としての條件を甘受することになるのである。又英佛がドイツの條件――「東南歐の獨ソ共同處理」等を容れて和平することは、今度は英佛が敗戰國たる地位に墮ちることになり、獨のラインランド進駐（一九三五年）以來英佛が失ひ來れる處の大國たるの威信を、ます〳〵失ふことになり、中立諸國が英佛を離れてドイツへ戀着するのみならず、自治領、屬領までが英國より離反するに相違ない。故に英佛獨の和平は、放つておいても容易に成立しまいが、尙その上にソ聯が之を攪亂するのだからます〳〵容易ではない。かく和平が到來しない場合、英佛獨共に疲勞困憊に陷る場合に、ソ聯が先づドイツを、それから英佛のみならず歐洲全體を赤化する際の據點として、ドイツの東方及び北方に伸びんとしつゝあるのである、と看做し得る。さうとすればドイツはます〳〵ソ聯に釣られて、防禦戰線の擴大を計らざるを得ないのである。（

又ソ聯がそんなに大膽に振舞ひ得ないだらうとも思はれるが、然しそれを肯定すべき動因も現はれつゝある。即ちフィンランド攻略であるが、フィンランド兵の善戰、森林、湖沼、氷雪等によるソ兵の戰死傷、凍傷等が十數萬に達し、ソ聯は國內は動搖するし、世界に向つては威信を失ふし、加ふるに英佛米伊の對芬同情は精神的、物質的、武力的に刻々

増大しつゝある。かくてソ聯は對内的對外的面子の爲にも對芬戰に勝たねばなるまい。

ソ聯が傳へられるが如く獨將校を顧問に迎へて軍隊を再編し、やがて雪解に乘じてフィンランド攻略に成功するならば、豫てより覗つてゐたオーランド島を占領して、ボスニア灣の制覇を完成し、バルト海への進出にも前進基地を得ることになる。さうなればスエーデンを攻略して、その低燐鐵鑛を手に入れようと努めるであらう。さうでなくてさへ、スエーデンが自國の武器及び英米佛伊の對芬援助品を、フィンランドへ輸送してゐるのみならず、義勇兵までもフィンランドへ送つてゐるのであるから、ソ聯がスエーデンへ攻め込むのは當然であらう。ノルウエーも同樣の地位にある。のみならず、ソ聯はノルウエーの港灣から、のび〳〵と大西洋へ乘出したいと翹望してゐるのである。これがピョートル大帝時代の北方戰爭（一七〇〇―二一年）の再現且つ完成である。ドイツが新行動を起さねばならないのは、獨り戰後の對ソ防備線を張るためのみならず、又、英佛が對芬援助を口實として、スエーデンを自家藥籠中のものとなし、之を基地に對獨攻勢に出て來るのを防ぐ爲でもある。ドイツはイタリーの飛行機が自國を通過してフィンランドに送られるのを中止して、ソ聯の對芬攻略を容易にしたのみならず、英佛米の對芬援助品がオランダ、デンマーク、スエーデン等を通過するのをソ聯及び自國の爲に阻止せんと試みるであらう。次第によつてはドイツは直接スエーデンに進擊して、英佛のスカンディナヴィア進出を阻止すると共に、ソ聯のそれをも阻止せんとする一石二鳥の手を打つかも知れない。ソ聯の方では對芬戰が思はしくなく、且つ反ソ戰線が世界的に結成されさうなので、モロトフ外相がベルリンに赴き、獨ソ同盟の締結を申込むとの噂もあるが、ドイツは自國のスエーデン攻略を條件に、之に應ずるのかも知れない――尤もドイツは上記の如くソ聯阻止の爲と、ソ聯の物資が對芬戰に消耗せられて、對獨輸出が減少するのを防がんが爲にソ芬和平を仲介せんといふ説もあるが、然しソ聯は戰勝國としての面目が立たねば和平は出來ないし、又それではフィンランドも承知出來まい――況んや世界からの後援、煽動がフィンランドを駈り立てるにおいておや。

二

右のやうなソ獨の攻勢に際會して、英佛米はもとより、ソ獨伊も、我國に對する外交上の態度を更新する必要に迫られて來た。從つて目下眼前に見る如く、我國の外交的立場は當分有利になつて來たのである。然しながら歐洲大戰が終る頃までも有利であるとは想定し得ないから、第一次大戰後のワシントン會議に於けるが如き苦杯を嘗めないやうに、今から國力を增進して、準備を整へることが必要である。

先づ當面のことをいへば、英國はフランスと共に、在支駐屯陸兵及び揚子江艦隊を引揚げて了ひ、我國との無益な衝突をなるべく避けやうと努めてゐる——尤も是以上在支權益や東南洋に於ける領土が壓迫を蒙らないやうに、英國はアメリカを番犬に使ふことに汲々としてゐるが。

米國は我國が南京以下の揚子江及び珠江を開放すると聲明したのに應じて、四〇年一月廿六日に日米通商條約が破棄されても、當分差別待遇を實施しないと通告した。尤も之は當分であつて、我國の支那事變處理方法が氣に喰はなければ、何時差別待遇を實施したり、對日經濟斷交に出たりするかも知れないのである——デモクラシー國とはいふけれども、近年の米國は政府の實行力が非常に强くつて、モーラル・エンバルゴーといふやうな議會外の手段で民衆を强引に引摺つて了ふので、對日經濟親交を望む民間業者の聲も壓倒され勝ちである。のみならず矢繼早に軍備擴張案や、グアム島・アリューシャン群島防備案を發表して、武力的にも我國を威嚇して來てゐる。然しながらかゝる威嚇は日ソ獨を接近せしめ英佛延いては米國自身の不利を來すので、米國は少くとも當分の間は、思ひ切つた經濟斷交や軍事行動に出て來さうにもないと思はれる。

一方ソ聯が對芬戰に手古摺つてゐること、世界的の反ソ感情及運動に際會してゐることなどはソ聯をして對日態度を更改するのやむなきに到らしめ、漁業問題、北樺太石油石炭問題、通商問題、國境問題等に於て、可成りの讓步的ゼスチュアを示しつゝある——尤も條

約だけは結んでも實行をゴマかすのがソ聯の常套手段だから油斷はならないけれども。

更にソ聯のバルカン、近東政策は、ソ聯をして我國に接近せしめざるを得ないであらう。そこまでソ聯が大膽に振舞ふかは一應疑問視されるかも知れないが然し最近の事情は矢張りソ聯の南下を必然ならしめる形勢にある。即ち四〇年一月六日ルーマニア國王カロル二世は、ベッサラビアの首都キシネフに於て對ソ强硬演說を爲し、ソ聯のベッサラビア奪回に對しては、武力を以て反擊を加へることを宣言されたが之はソ芬戰に於けるソ軍の脆弱性の暴露を見て、ルーマニアは急に氣が强くなつたのだとの說を、世界に流布せしめることになり、ソ聯が對外的對內的にます〳〵威信を失ふことになつたので之を雪ぐ爲にもベッサラビア工作を敢行せねばならぬことゝなつて來たのである。その時機は、ソ聯の本心からいへば雪解を待つて對芬戰に勝利を得たる後即ち四五月頃にしたいのであらうが、ソ聯自身がソ軍を誇大宣傳して來た手前上、もつと急がねばなるまい。即ちソ聯は人口一億七千萬、動員數一千四百萬と自稱してゐるのであるから、トハチェフスキー元帥の對日獨東西兩作戰論の傳統を維持する上からも、數面の作戰可能を實證せなければならぬ。しかも現に對芬國境の外に、ルーマニア、トルコ、イラン、アフガニスタン、インド、滿蒙等に對する國境のみならず、西部支那方面にも數多の軍團を駐屯せしめてゐるのである。本來は此の駐屯による恫喝外交で工作を遂行したいのであり、そして沿バルト三國に對しては成功したのであつたが、フィンランドに對しては豫想に反して恫喝だけでは失敗に終つて戰爭となりそれが爲に前駐芬ソ公使は處罰されたとの報がある――しかもその對芬戰にソ軍の弱體を暴露してゐるのであるから、恫喝外交はます〳〵利かなくなり、ソ聯はます〳〵白日下に馬鹿にされるので、上記諸駐屯軍を實際に急いで動かして見なければなるまい。そして對芬戰に於けると同じく、再び引つかゝり手古摺るであらう。

けだし最近に於けるイタリアの反ソ運動は、いよ〳〵鮮明となり、よしや武力を以てバルカン諸國を援助することは、背後關係が危いので、無いとするも武器や飛行機を送つたり、飛行士や陸海將校を派したりするぐらゐのことはするであらう。現にフィンランド戰

に於て、イタリア飛行機がイタリア飛行士によつて活躍しつゝあるが、之は玆にソ軍を引つけておいて、ソ軍がバルカンに南下するのを牽制する爲であり、いよ〳〵ソ軍がバルカンに進入するとならば尙更援助を濃厚にするに相違ない。最近伊洪防衛同盟の成立が喧傳され、イタリアを盟主とするハンガリア、ルーマニア、ユーゴ・スラヴィア等のバルカン中立ブロックの結成も有望視され、從來之に對して障碍を爲してゐたハンガリアの對羅失地（トランシルバニア）恢復要求もハンガリアの方から緩和されると共に、ルーマニア側からも領土權の讓渡は困るが、民族自治權及び經濟上の利益ぐらゐならば洪に讓步すると申し出してゐるので、ソ聯がベッサラビア奪回を企てる時は、ルーマニアを先鋒とし、伊、洪等を後衞とする相當の反擊に逢ふに相違ない——ユーゴー・スラヴィアは此際伊軍がルーマニアへ通過することを承認したとの報がある。英國はルーマニアに安全保障を與へてゐるが、イタリアが嚴正中立の際は、海陸空軍を以てダーダネルスを越へてルーマニア救援を敢行するとは思へない——が伊が對羅援助に出る場合には、之に合流するであらう—伊海軍が黑海に進出する限り、英國はかくしても地中海に危險を感じないからである。

ソ聯は之に對して比較的スラヴ族の多いブルガリアを抱込み、之と通商航空條約を結び、又羅よりのドブルヂア奪回援助を約することによつて、其の立場を强めんとしてゐるが、いづれその對羅戰は面倒となるに相違ない。

かくの如くソ聯がフィンランドのみならず、バルカンに於ても泥沼に足を突込んだやうな事態に陷るならば、ます〳〵對日滿態度を更新しなければならなくなるであらう。尤も此のイタリアの動き、伊の對英米接近は我國にとつて必ずしも有利とはいへないが。

或はソ聯はバルカンが手剛しと見れば、近東への侵入を先にするかも知れぬ。ソ聯がバルカンへ進出せんとする慾望は、第一次大戰に至るまでの度々の南方戰爭——クリミア戰爭、露土戰爭（一八七七—七八年）等——に見た如くスラヴ民族の傳統的本能であるが中東、近東進出も亦さうである。然るに英國は印度を防衞せんが爲には、このロシアの近東への南下を阻止しなければならぬので、一方日英同盟（一九〇〇年）を結んで日本をして

ロシアを牽制せしめると共に、他方には自らロシアとの間に勢力範圍協定（一九〇六年）を結んで、西藏、アフガニスタン、ペルシャ（今のイラン）の北部はロシア、南部は英國の傘下に收めることにしたが、日露戰後（一九〇七―八年）に於けるロシアの弱體化で近東は殆ど全部英國の勢力圏となり、更に第一次大戰後に於けるソの赤化弱體化によつて此の傾向はます〳〵強化されたが、近年はトルコ、イラク、イラン、アフガニスタン等はソ聯の援助によつて英國よりの利權（特にイラク及イランに於ては石油利權）回收に努め來り、最近年に至つては再轉して、ドイツの助力によつてソ聯をも袖にせんとする傾向を生じつゝあつた。然るに今やその英獨が鷸蚌の爭をやることになつたので、今こそソ聯が漁夫の利を占めて近東へ進出し、石油や鑛物や農畜産物を入手すると共に、ペルシャ灣や印度洋に達すべき秋と考へるであらう。ソ聯がドイツとポーランドを分割した時は、ソ獨接近を恐れて顧みて他を言つてゐた英國が、最近俄かに對ソ態度を硬化し、ソ聯を國際聯盟より除名するに際しては主役を務め、對芬援助を濃化し、溫厚紳士型のチェンバレン首相すらソ聯を「海賊」と罵るに至つたのも、北歐に於てソ聯を牽制して、その近東、印度への南下を背後より阻止せんとするにあるのである――同時にフィンランドに「人道的、物資的」援助を與へんとする米國の氣を迎へ、米國をしてます〳〵歐洲問題に深入りせしめんとするのでもあるが。

三

我國目下の焦眉の急は、汪政權を支援すると共に、一切の物資の生産力擴大にあることはいふ迄も無いが、それには今尙米國より必要資材を輸入すると共に、對米並に對第三國輸出を增大して、此の輸入代金を支拂はねばならぬ。然るに若し米國が對日通商條約破棄を實行したり、經濟斷交を敢行したりする時には、我國はソ聯と濃厚なる通商條約を結んで必要資材を獲得しなければならぬ。恐らく米國がそこまで東亞の事態に干涉し、我國を壓迫し來る時には、我國も九國條約の廢棄を斷行し、東亞に於ける米國の權益を擁護する義

務なんぞより解放せられ、結局は日米國交は米國の責任に於て危殆に瀕するかも知れぬ。然る際には我國は對芬問題で米國を怨めるソ聯と不可侵條約乃至軍事同盟をすら結んで、我國の外交力を強めると共に、ソ聯の對歐又は對近東、印度進出を促進するかも知れぬ。之はドイツの對英攻擊をば有利にする。然らば英國は致命傷を蒙り、延いては米國は武力的にも第一次大戰時に於けるが如く、英國援助に乘出さねばならなくなるであらう。米國はかゝる愚かなる道を選ぶであらうか。

我國としても、早まつて日ソ同盟などの擧に出づる時は、米國を強いて如上の道に驅り立てることになるであらうが、日米經濟斷交や日米戰爭は、米國にとつてと同樣に我國にとつても不利を齎らすものであるから、我國から先手を打つて日ソ同盟にまで漕ぎつける必要はないと思ふ。米國に於ては日米經濟斷交は、日本の對支態度次第だといふが、日ソ同盟も米國の對日態度次第なのである。我國は冷靜に米國の出方を觀察すると共に、それに對する方策を練つておかねばならぬのである。

——昭和十五年一月十日稿——

二三　獨ソ戰と東亞の動向

一

昭和十六年六月二十二日、獨ソは遂に開戰した。思へば十四年九月一日、ドイツがポーランドに向つて電擊作戰を初め同三日英佛が對獨戰爭に立ち上つた時、筆者はソ聯が反獨參戰に立つであらう場合を想像して、（一）獨波戰の最中に、東ポーランドに於て、波軍を援助しつゝ、ゲリラ戰に出る場合、（二）獨英のバルカン、近東戰、殊に三B線の奪ひ合ひに際して、反獨參戰する場合、（三）獨逸が疲弊した際、之が赤化に乘り出す場合と、三場合を想定しておいたが、第一の場合は豫め獨ソの間に、祕密協定があつたと見えて、

獨波戰半ばに、ソ聯も對波侵略戰を起して、ドイツと仲善くポーランドを分割した。東ポーランドは、第一次大戰の際ポーランドが、ソ聯より奪回した（十八世紀に波は露・獨・墺に三分割された）地方なので、今度はソ聯が失地を恢復したのだといつてゐるが、それにしてもソ聯は「帝政時代の侵略利權は全部放棄する」と宣傳してゐたのが、嘘の皮であることを今や表明したのである――尤も東方に於て、外蒙やソ滿國境地方で、既に侵略主義を發揮してゐたが、續いてソ聯は沿バルト三國を傘下に收めて味を占めると、今度はフィンランドに對して開戰し（十四年十一月―十五年三月）カレリア地峽、ラドガ湖畔、スレド、リハチ兩半島、ハンゲを獲得乃至租借した。十五年四月突如としてドイツ軍がノルウェー、デンマークに進駐したのは、一はナルヴィック港を入手して、スエーデン低燐銑の海路輸送を確保せんとしたこと、一は英國がノルウェーを占領せんとしたに對して先手を打たんとしたことが、その原因であつたが、其他にソ聯の飽くなき北方侵略を牽制せんとするにあつた。

續いて五月から六月にかけてドイツがオランダ、ベルギー、ルュクサンブール、フランスを攻略した際に、ソ聯はバルト三國に軍隊を進駐して之を併合し、又ルーマニアからブコヴィナ及びベッサラビアを奪取した。之に對抗してドイツ軍も十月ルーマニアに進駐して、殘餘のルーマニア國土及び年產八百萬瓲の油田を、ソ聯の觸手より確保した。尤もその中前大戰に羅が獲得したトランシルバニアはハンガリアへ、南ドブルヂアはブルガリアへ返還されたが。

ポーランドのみは獨ソ諒解の下に仲善く分割したのであるが、それ以後はソ聯はドイツの諒解なしに貪慾に侵略の手を延べ、しかも今やドイツを北、東、南の三方より包圍する態勢を採り、獨ソ國境にはフランスのマヂノ線に倣つて堅固なるスターリン要塞線を築き百數十ケ師の大軍を配して、ドイツの後方を脅かすに至り、ドイツまた之に對抗して大軍を派して、應戰的態度を採るに至つたが、此の對立は其後のバルカン問題を挾んで、發火點に達した。

即ち十五年十月より始まつたイタリア、ギリシア戰爭が、伊側に不利に發展するや、ドイツは側面よりイタリアを援助せんが爲に、本十六年三月一日ブルガリアを日獨伊三國同盟に加盟させ、同時に軍隊を進駐せしめた處、同四日ソ聯はブルガリアに對して不滿を表明した。蓋しブルガリアにはスラヴ人の居住するもの多く、ソ聯は同國のパトロンたる自負を持つてゐたからである。されば同じくスラヴ人が多く居住し、前大戰には汎スラヴ主義の尖兵となつて戰端開始の切つかけを作つたユーゴー・スラヴィアが、三月二十五日に同じく三國同盟に加盟するや、ソ聯は英國と共に暗躍して、同二十七日に軍部クーデターを起さしめて親獨內閣を顚覆せしめ、續いて獨軍がユーゴー及びギリシアに進擊せんとする日（四月六日）の前日に、ソ聯はユーゴーと友好不可侵條約を結んで、ドイツを憤激せしめた。

然しドイツ軍は例の如く電光石火、一月足らずの間に、ユ・ギの山野を席捲し、エーゲ海の諸島を占領し、續いて前代未聞、グライダー及びパラシュート部隊のみを以て、クレタ島の英希軍を潰滅して之を占領するや、ソ聯は黑海よりダーダネルス海峽を通つて、地中海に出るルートを完全に遮斷されて了つたのである。かくて獨ソの對立は暗默の中にますます激化しつゝあつたのである。

先に四月十三日に日ソ中立條約なるや、同十六日ヒトラー總統は突如として、獨ソ國境に「東部防壁」が近く完成すべきことを發表するかと思へば、五月六日スターリン書記長はモロトフ人民委員會議々長を排して、自ら議長に就任し、黨と政府の一元化を計り、その頃より獨ソ緊張說が頻々と流布されて、世界の耳目を聳だたしめるに至つた。

然し筆者の如く裏面の消息に通ぜぬ者は、尙獨ソ協調を信じてゐた。蓋しソ聯が今次大戰前に獨ソ不可侵條約を結んだのは、前大戰の如く英米佛の爲に、火中の栗を拾ふことを避けんが爲である。英佛と結べば强豪、獨と戰つて血を流す外に何等得る處が無いに反し、獨と結べば獨英戰を高見の見物をしながら、漁夫の利を占め、既にフィンランドからルーマニアにかけて、多くの利益を得たが、更に歐洲新秩序を容認する代償として中東歐廣域

圖を獲得するであらうからである。トルコは問題であるが、之に就てはドイツが一歩を讓つてダーダネルス海峽を獨ソ土共同管理とする代りに獨軍がトルコを通過して、一はシリア、パレスティナよりスエズを攻略し、他は既に五月初めより英軍が占領せるイラクに進攻し、モスール油田を獲得すると共に三B線を辿つてバスラ、ペルシャ灣頭を占領して、英印ルートを遮斷する事をソ聯が許すであらう——勿論ソ聯も三B線を共同使用し得ることを條件として。もしもトルコが上記の要求を聽かざる時は、再びポーランドの場合の如く、獨ソ共同出兵し、ソ聯は前大戰時にトルコに奪はれたる、カルス、アルダハンの失地をも恢復すべしとさへ考へられたのである。

然るに其後獨ソ共同して對土要求に出るやうなニュースを聞かず、寧ろ五月初めよりパーペン駐土獨大使が、ベルリン、アンカラ間を往復して、單獨交渉を繰り返しつゝあるのを聞くのみ。しかもそれ以前にソ聯がトルコとの不可侵條約を再確認せる聲明を發してドイツを牽制せる事實、英國の駐ソ使節がソ聯の飛行機でアンカラに飛び、英土同盟を强調してドイツを牽制せる事實の方が、强く世界に印象を與へてゐたのである。

而して遂に六月十八日獨土間に單獨に友好不可侵條約が成立し、ドイツはトルコの中立を確保するや否や、二十二日對ソ軍事行動を惹き起したのである。今次大戰初期に筆者が豫想した第二の場合、卽ちバルカン、近東問題で、遂にソ聯はドイツの怒りを買ひ、再び前大戰當時の如く、英米に漁夫の利を占められるに至つたのである——但し獨ソ戰が短期に獨側の勝利に歸し、ドイツが後門の熊を逐ひ拂ひ、しかもウクライナの食物と鑛物、コーカサスの石油を得るならば、英米は漁夫の利を得られざるのみならず、前に數倍する攻擊を受けるであらう。ドイツにして見れば自國は兎も角も、ノルウエーからフランスに至る占領地帶、それからスペイン、イタリアに對しても、ドナウ沿岸の食糧の外に、更に新たに食糧と、それからルーマニア油田の外に新たに石油を獲得して、分配する必要に迫られて來たのである。ソ聯は數度の獨ソ通商條約によつて、之等の物資を豐富に供給すべきことを約しながら、スラヴ式非能率と橫着とによつて忠實に約を履行しなかつたのである。

而して六月十五日リッベントロップ獨外相はデカノーゾフ駐獨ソ大使に、之等の物資並びにそれの輸送の共同管理を要求して拒絶されたらしい。以上ソ聯に對する軍事的、經濟的理由より獨ソ開戰となつた經過を擧げたが、尙一つの原因は、狂氣の如き米國の援英行爲並びに對樞軸壓迫――殊に最近の獨伊の在米資金凍結、領事その他の駐米員引上要求、在米獨伊船の沒收等々を見て、ドイツはいよ〳〵對英米長期戰の覺悟を定め、それが爲の後方確保を決心した點にある。

二

さて獨ソ戰爭が短期に終るか否か、次に米國が之に關聯して參戰するか否かによつて、東亞が受ける影響は著しく異るであらう――日本自身が東亞を動かし、延いては世界に影響を與ふる所の、イニシアティーヴを採らないかぎり。

去る六月二十二日に戰端が開始されてから今日七月十二日までに二十日を越したが、その間に獨軍は、大體今次大戰でソ聯が橫領したものを奪回し、舊ソ聯の西部國境のスターリン線に到着し、その中の一部分たるミンスク地方では、スターリン線を突破し、モスクワまで三百六十粁のスモレンスク近くまで、ソ領內へ進攻してゐるが、その他の部分では戰鬪は稍々膠着に陷つてゐると報ぜられてゐる。

然し乍ら一派の軍事專門家の見解によれば、之は單なる膠着ではなくて、殲滅戰なのである。開戰當初は猛烈な電擊戰で、前進したが敗殘敵兵を後方に殘し、之がゲリラ戰に出てくるのを防止する爲に、時折前進を止め、南北に展開し、且つその先登は後方に逆轉して、廻轉扉式に敗殘兵を包圍殲滅しつゝあるのだ、といふのである。

ベルリン六月八日發同盟電報は、此の戰果の大きさと速さを報じて曰く、昨年フランダースの殲滅戰が十五日かゝつたのに對し、今回のビアリストック（獨領ワルシャワから上記ソ領ミンスクに至る途中の要衝）附近のそれは僅か十日しか要せず、また西部戰線で、英佛聯合軍の主力部隊が降伏したのは、十八日目であつたが、今回のビアリストック、ミ

ンスク兩戰鬪では十二日目であり、更に西部戰線では、獨軍の機甲部隊は十日間に三百キロ進出したが、今回東部戰線では、同じ距離を八日間に突破してゐる。道路が極めて悪い戰場で、このやうな戰果があげられたのは、獨軍にとつて全く豫想以上の好成績と言ふべく、スターリン線潰滅後は、更にスピードを加へて一路モスクワへ進擊するものと觀測されてゐる。又獨軍は現在絕對的優勢な空軍を以て、赤軍の後方兵站輸送線などに猛爆を加へ、後續部隊物資輸送のトラックや軍用列車に對して殲滅的な打擊を與へつゝあるが、これはやがてまた方々で、包圍戰を遂行する可能性を著しく增大するものと見られてゐる、と。

而して十日發の同盟電報は、同日までの獨軍の戰果を、驚くべし、ソ聯將兵の捕虜四十萬、擊破飛行機六千三百餘、砲四千四百門、戰車自動車七千餘と報じてゐるのである。

一方ソ聯側では逆に、ドイツの損害を尨大に報じ、赤軍が防戰に良く努めてゐることを宣傳してゐるが、ソ聯當局の英米側の報道並びに見解は、依然として獨側に有利で、獨軍は一、二ケ月でモスクワを占領するであらうといつてゐる。(一八一二年の同じ六月二十二日にナポレオンはリトアニアのニーメン河を渡り、八月十七日、スモレンスクを占領し、九月七日ボロヂノの決戰を行ひ、同十四日モスクワに進入し、十月十九日に同市より退却した。)

もしかゝる報道及び見解が眞なりとすれば、スターリン政府はウラル山脈附近の、スヴェルドロウスク(舊エカテリンブルグ)に逃避し、その附近の豐富なる重化學工業資源及び石油を利用し、既に存在する軍需工業を擴大して、飽く迄もゲリラ戰的反擊に出て來るであらう、かく主力戰は一、二ケ月の短期戰に終つても、春季攻勢とか秋季攻勢とかいふものはいつまでも長期に續くであらう、と考へられる。此際米國が浦鹽から救けるであらう。

然しながらかゝるゲリラ的反擊の效果は、獨軍をして占領地帶を放棄せしめるほど、有效なものではあるまい。何となれば既にソ聯の飛行機の三分ノ二は擊破され、制空權は殆んど獨軍に握られ、殘るソ聯の戰車、自動車及び兵員も、ミンスクよりモスクワへ退却す

る途中に、ドイツの優秀快速の飛行機及び機甲部隊の爲に殲滅的打撃を與へられるだらうからである。而してソ聯がモスクワの軍需工場を放棄するとすれば、スヴェルドロウスクの未完成の工場などで、容易に迅速に、武器殊に質量共に尨大複雜なる飛行機、戰車、火砲などの精密武器を製造できるものではない、と思はれる。之等の武器の製造設備の建設だけでも、數年を要するのである。

モロトフ外相はかつてナポレオン戰爭の場合の如く、モスクワを燒却して獨軍を飢寒に陷れんといつてゐるが、獨軍は永くモスクワを占領してゐる必要がなく、モスクワの政治都市としての面目及び工場が破壞するならば（しかも赤軍の手で）それで赤軍の軍事能力とスターリン政權の政治能力の大半は消滅するのだから、モスクワを引上げ、キエフ、ハリコフ等のウクライナの都市を占領して、小麥その他の穀物、鐵、石炭、マンガン、その他非鐵金屬を確保し、バツーム、バクー等のコーカサスの要衝を占領して、二十萬噸の石油を確保してゐれば好いのである。他の部隊の中一部は、芬軍と共にムルマンスク、レーニングラード、それからハンガリア及びルーマニア軍と共に中南部の舊ソ聯國境を守つてゐれば良いのである。更に他の一隊はイランへ出て一千萬噸の石油、それからイラクへ廻つて四百萬瓲のモスール石油を確保しつゝ、一隊は三B線を下つてバスラに出て、ペルシヤ灣頭を占領して、英國と印度との陸空路を遮斷し、他の一隊はシリア、パレスティナを攻略して、その頃リビアから東進する獨伊軍と共にスエズを挾擊して、歐洲、近東、北阿に於ける英米の最後の據點を覆滅するであらう——尤も更に征路千里エチオピアを奪回し、アデンの英軍港を占領して、紅海の制海權を握らねばならぬが。之に成功すれば米國が參戰するとも、ドイツは長期戰に堪えて行くであらう。

三

然し此の獨ソ開戰が英國の狂喜する所となつたことは、いふ迄もない。米國に逃避しつつあるアイルランドの劇作家バーナードショウが、此の漁夫の利は話が甘すぎるといつた

のは、當然である。早速チャーチル首相はソ聯援助を聲明し、その後、國内の共産黨の擡頭及び各國の反共十字軍の結成を（――各國に於ける共産黨の擡頭をも）内心恐れながらも、ソ聯との實際的聯携を策し、軍事使節のモスクワの訪問を始め、イラクの英軍をイランを通過せしめて、コーカサスのソ軍と聯絡せしめんと計つてゐる。此間シリア戰線に於てフランス軍を降伏せしめ、全シリアの占領、フランス・シリア艦隊の引渡等の、休戰條約を提出して、氣を好くしてゐる。之に對して米國は更に拍車を加へ、英ソ同盟を策しつつある樣子である。

米國自身が獨ソ戰爭に如何なる態度を採るか、世界史の運命を左右するほどの事件として、世界の注目の的となつたのは當然のことである。米當局は最初獨軍の電擊的進出に呆然とした體であつたが、稍ソ聯の抵抗が强化され、戰線膠着の見込が立つや、密かにデンマーク領のアイスランド（氷嶋）を占領し、玆に海空軍の基地を設けたことを、七月七日突如發表して、米人ならびに世界を驚かした。氷嶋はドイツの封鎖宣言區域たる西徑二十度以内にあり、しかもドイツの北海海空軍の基地たるノルウェーの目と鼻の先にあるのに、米國は此地を基地として海空軍を以て北海を哨戒し、ドイツ海空軍の所在を英艦船に密告するのである。米國中立法の條文には米國商船が交戰水域に入ることを禁止する文言はあるが、「軍艦」を禁止する條項がないので、中立法違反に非ずといつてゐるが、之は三百代言的に米國民を僞瞞したものであるのみならず、國際法上の中立違犯たることは言ふまでもない。

その他、米政府は「西半球の防備」を强調し、グリーン・ランド（綠嶋）は地理學上西半球にありと稱して、曩に之を占領し、援英物資を米船で此處まで輸送し、此處で其物資は英船に積み換へられ、英艦護衛の下に、英軍（八萬）の占領せる氷嶋近海を經て、英國に向つたのであるが、今や明白に西半球に非ざる氷嶋をも「西半球防衛の爲に必要なり」「西半球防衛の爲に必要とあらば、如何なる地方へも進駐しなければならぬ」といふやうな詭辯を弄して、氷嶋を占領したのである。

然しその行爲が國際法違犯であるとか、デンマークの舊駐米公使と馴れ合ひで强引に占領したのであつて、デンマーク本國は此の米國の行爲を侵略行爲として憤激してゐるとか、或はルーズヴェルト大統領は非參戰を標榜して選擧に當選しながら、その後一歩々々と詭辯と狡計を以て、國民を參戰の方向へ引摺りつゝあるとか、兎角の批評を試みても詮なきことである。

蓋しルーズヴェルト大統領、ハル國務長官、ノックス海相、スティムソン陸相を始め、米國政府首腦部は早くから參戰の腹を決めてをり、その目的は英國の遺産を相續して世界制覇を遂げるにあるのだから、始は非參戰を標榜したが、事を構へ、辭柄を弄して、結局は參戰し、勝利を得、米國の利益を計らうとするのである。されば民主々義の重慶のみならず、今や獨裁的共産主義を採り、信教、言論、所有、生命の自由を否定するソ聯をさへ援助せんとする――西半球防衛といふやうな、イデオロギーは一切棄てゝ米國の利益となることなら何でもするのである。されば氷嶋のみならず、北アイルランドにも、英本國にも、海空軍基地を設けつゝあり、又ポルトガル領のアゾレス群島、カボー・デ・ヴェルデ諸島、及びフランス領北西アフリカのダカールをも占領せんと謀略をめぐらしつゝあることが米國議員によつて暴露されつゝある。

如上の行爲は、ドイツが對ソ戰に奔命せる空巣を狙つて、大西洋の東半球に米國の基地を進めた進攻行爲であるが、其他には大西洋の西半球側にニューファンドランド島からバミューダ島を經て、南米ギアナに至る英領を、米國驅逐艦百隻と交換して獲得し、太平洋の英屬領すべて、それから蘭印諸島にも基地を築き、今やシンガポールに米國海空軍が進駐して、印度洋、ペルシャ灣、紅海までも星條旗が飜へりつゝあり、また米英支蘭印が協力して南支那海、西太平洋に彼等の覇權を確立せんとしつゝある。現に英國が先鋒となつて泰國の周圍（ビルマ及び馬來）に七十數個の飛行場を設け、十數萬のアンザック（濠洲及び新西蘭兵）印度兵、蔣軍等を配し、又あらゆる政治的、經濟的壓力を加へて、佛印が大東亞共榮圏に傾かんとするのを妨害しつゝある。

更に又、西太平洋の北方に於て――そしてこれこそ獨ソ戰と東亞問題とが、米國によつて直接に結びつけられる點であるが――米國は、アラスカ、アリューシャン群島防衛を名として、カムチャッカ、沿海州をソ聯より買ひ入れるとか、シベリアに飛行基地を設けるとか、種々の進攻說が、矢張り米國の議員によつて質問せられつゝある。政府は極力之を否定しつゝあるが、米國が極東に持つ關心――日露戰後、米國鐵道王ハリマンの、シベリア線及び北淸線買收運動、第一次大戰中ロシア革命に際して、日本がシベリアに出兵するや、米國も出兵して執拗にわが軍事行動を妨害したる事實、尼港事件に際して我國が北樺太を保障占領したのに、米國が極力反對したる事實等によつて知られる――の深さを知るものは如上の說を單に風說と聞き流し得ない。議員の質問は政府との馴合ひで、此の占領行爲の對日反響を見んが爲の、バロン・デッセイではないかと思はれる。

よしやそこまで侵略的ではないとしても、米國がソ聯を援助せんが爲に、從來休航してゐた、浦鹽航路を再開することは、既に新聞に報ぜられたところであるから、續いて此の航路保存を名として若干の海空軍を浦鹽港に進駐せしめることは、當然あり得ることである。

かゝる世界並びに東亞の情勢に對して、我國は如何なる態度に出づべきか。

政府は七月二日の御前會議に於て、その態度を決し、松岡外相の談として、之を次の如く發表した。卽ち「獨ソ戰爭は唯これを二國間の戰爭であると考へることは出來ない」、「細心の用意と、固い決心と覺悟とをもつて、嚴重に事の推移を見守る考へである」と。而して處士橫議を嚴に戒めたのである。

もとより如何なる政治的、外交的軍事的行動を採るべきや、などは事情に通ぜぬ者の論議を許さゞる問題であるが、少くとも經濟問題としては、此際露領漁業問題、北樺太石油及び鑛山問題の根本的解決を計るべきである。過日の新聞では、今年は石油事業に雇傭すべき勞働者を、當方よりの要求數の六分ノ一を供給し來つたさうであるが、もつと强く要求を貫徹すべきである。

又、去る六月十一日成立したる日ソ通商條約に基き、極力輸入を計るべきである。恐らく不便なる極東の資源までをも、歐露へ輸送しないであらうから、北樺太の石油や極東シベリアの鑛物などは、我國に輸出し得るであらう。此の貿易協定は一對一の求償貿易で、石油、マンガン鑛、白金、肥料及び雜品等を年三千萬圓輸入し、生糸、繭、機械及び器具類、樟腦油、雜貨及び其他を、年三千萬圓輸出するものであり、支拂協定は日本內地の正金に圓建の口座を設けて、輸出入を決濟し、剩餘は外貨に換貨し得ると規定され、尙通商協定に於ては關稅その他の待遇について、お互に最惠國扱ひをすべきことを協定せる頗る友好的なものである（關稅等を規定せる通商協定は五ヶ年、貿易及び支拂協定は一ヶ年有效とし、兩者共に廢棄通告を爲さゞる時は自動的に延長せられる）。

日本より輸出する貨物は、先づ〳〵平和品で、國際公法に觸れる貨物ではなく、又盟邦ドイツに對して、不信義にもなるまい。尙外交的には、日獨伊三國同盟條約はソ聯を除外してゐるし、又去る四月十三日の日ソ中立條約があるので、我國は中立を守つてゐて差支へないのであらう。

然しながら此際三千萬圓ぐらゐの貿易增加（それも期待通り實行せられ得るかは不明であり、且つドイツとの價値ある貿易が杜絕した）を以て、漫然と事態を見送るべきや否やは疑問である。特に南方に於ては日蘭會商は決裂して、芳澤代表は空しく引上げるし、佛印に於てもサイゴンのフランス人、ショロンの華僑等は、英米猶太人と聯携して容易に親日に轉ぜず、最近にも佛印政府は親日安南人數百名を、ユエ、ツーラン等に於て慘殺せりとの報道がある。

又、重慶政府は今こそ思惑通りの以夷制夷外交を發揮し得ると北叟笑み、頻に英米ソ支同盟など喧傳しつゝあり、かくなれば、いよ〳〵東西の事件は一つとなつて、世界を擧げての動亂となるであらう。東亞の事件は、東亞だけで單獨に解決することが出來なくなつて終つてゐるのである。

否、それよりも先に、氷島にある米海空軍とノルウェーを基地とするドイツ海軍とが衝

突する時――既に米海軍當局は過日、接近し來りし獨潛水艦に警戒的に爆雷を發射したと公言してゐる――、過日の外相聲明にもあつた通り、いよ〳〵三國同盟條約は發效するのであらうから、我國はそれこそ「細心の用意と固い決心と覺悟とを以て」待機してゐなければならぬのである。我方で戰爭を避けようと思つても戰爭の方から我に迫つて來る。

尤も米國自身の態度は、目下の處まだ示威的であつて、參戰の決心はつかぬ模樣であり國民も六十％くらゐ尙反戰的である。（但し米國大統領は宣戰權は有せぬが統率權は之を有するので、勝手に海空軍を獨軍に衝突させ、第一次大戰前のルシタニア號事件の時のやうに、センセーショナルに事件を囃し立てゝ、議會を宣戰に引き摺り込むことは可能であるが）。しかもよしや參戰の決意をせんとするも、慾の深い米國は、その對日パーと自稱せる艦船を、大西洋のみならず、紅海、印度洋、それから西太平洋、それも前記の南太平洋の外にハワイ、ミッドウェー、ウエーク、グワム、比島、香港の中部太平洋、それからアラスカ、アリューシャン、カムチャッカ（？）沿海州（？）の北太洋、尙その上に中南米へも分散しなければならぬことになるが、米當局は果してそれで成算が立つのであらうか。從つて參戰の決意を爲し遂げられるのであらうか。

されば我國は自主獨往、充分の用意と毅然たる態度を以て待つあるを恃まねばならぬのである。

――昭和十六年八月稿――

二四　獨逸防共思想序說

一

防共協定の實質的意義が軍事的及び外交的の力にあることはいふ迄もない。今次の支那事變に對して、英米ソが立ち上がれないのも、伊太利の地中海湖水化政策や獨逸の植民地返還要求やに對して英佛が强氣に出られないのも、此の協定が物を言つてゐるからに相違ない。然しながら此の協定は歐洲大戰前の舊い唯の協定や同盟と違つて、全く新らしい現代的な叡智と機動性とを含んでゐる。而してそれは大戰前の同盟等には全く見られなかつた思想的要素を含蓄してゐるからである。大戰後に始めて世界を動かし始めた國際マルキ

シズム卽ちコミンテルン思想及び國際デモクラシー卽ち聯盟思想に對して、反對思想を唱ふることによつて、日獨伊協定が結ばれ、而して此の反對思想を中心に三國が力を合せて變通自在の活躍をせんとする處に、歷史上未だ曾て見なかつた新味がある。

反對思想とは何か。それはマルキシズムとデモクラシーが其の階級的基盤を異にするにも拘らず、いづれもインタナショナルなるに反して、協定各國はいづれも民族又は國民の個性（自由、文化、歷史）を擁護せんとする國民主義たる點にある。三六年十一月末日獨防共協定が成立した際、獨逸側の產婆役だつたリッペントロップ駐英大使は、「此協定は、コンミュニズムが抽象的普遍主義を唱ふることによつて、各國民の個性と文化とを破壞せんとするに對して、我々は各國民の個性を擁護せんとするにある」と宣言したが、此の一言こそは防共協定の思想的核心と劃時代的意義を的確に表現したものである。

マルキシズムは社會の實體は階級の外の何物にもあらずと認識し、階級を「經濟概念」（所有關係概念）を樞軸として有產無產の二階級のみに限定し、兩者の鬪爭による經濟史

の辨證法的發展の結果、必然的に無產者階級の勝利が齎らされ、「フリー・キングドム・オブ・コンミュニズム」が出現するが故に、各國の無產者は國境を越え、國民性を棄てゝ、團結せよと唱ふるのである。それは、各國の無產者階級も、各國それ〴〵獨特の國民的實體の中にあつて、始めて存在し得るもの、否現に存在せるものなることを故意に閑却するものである。櫻の花は武士の如き個性を備へ、梅は乙女の如き趣を含むにも拘らず、かゝる個性を沒却し、唯其等の花瓣の數のみを抽象して櫻をも梅をも五瓣花といふ普遍的概念に齎らす所の自然科學者の態度と同じである。それは抽象的普遍主義である。之に反して協定側の認識論的立場は、個々のものに就いては夫々其の個性をアプリオリとして個別的概念を作らんとする具體的個別主義である。文化科學の立場である。ヒトラーが「獨逸に於ては有產階級も無產階級もない、唯相協力する生產階級があるのみだ」と云ひ、ムッソリニーが「伊太利の如き貧乏國では階級鬪爭の如き贅澤は許せない」と云ふのは、各國の階級は各國民夫々の具體的個性的存在樣式に依存せるもので、國民を放れて、世界を橫斷的に、階級其れ自身としては存在することが出來ないものであることを喝破せるものである。此のことは國際主義を唱へる英米佛ソの勞働者農民が、イタリー人や日本人の移民を嫌忌排斥するのを見れば、痛烈に感ぜざるを得ない事實である。ソ聯邦では最近極東に永年生活を築いてゐた數十萬の朝鮮勞農民を、根こそぎ其の生活基盤から引離して、中央亞細亞へ移住せしめたといふが、それは如何に階級獨自の實在性を認めず、國家の都合によつて自由に其の實在性を奪ひ得るかを、語るに陷ちてゐるものである。

階級其の物の國際的實在性の主張が虛妄であるにも拘らず、コミンテルンが各國民に向つて之を唱へるのはペテロ大帝以來のロシア侵略主義を實現せんとする手段であることを、協定側は看破した。卽ち、それは各國に階級鬪爭を起させ、之を內亂又は戰爭に引き入れ、各國の國民的存在を崩壞せしめ、其の跡に結局ソ聯がヘゲモニーを握らんが爲の戰術であることは、スペインの內亂や支那事變を見れば、一目瞭然たる事實である。而も其跡には勞農民の自由王國は來らずして、ソ聯政府の搾取的支配が生ずべきことは、ブリヤ

ート・モンゴルや外蒙に於ける彈壓事件や先に擧げた朝鮮勞農民事件が立證するのである。協定各國はマルキシズムのかゝる僞瞞――侵略の爲の假裝を引剝いで、各國の國民的自存と、其中に於ける生產階級の存在とを擁護せんとするものである。

日獨防共協定の中に伊太利が加盟して來たので、協定は其の內容が著しく豐富多彩となり防「共產主義」の上に、防「民主々義」を加へ、ソ聯の外に英佛を向ふに廻すことになつて來た。之はソ聯のスペイン干涉、ソ聯黑海艦隊の地中海への出航等に對する伊太利の防衞策たる上に、伊太利の地中海湖水化政策に對する英佛――主として英國の妨害に對抗せんとする伊の外交策ではあるが、玆にも思想史的意義が含まれてゐる。

民主々義――個人自由主義の社會思想は、個人を以て社會の實體なりとし、「社會」なる概念は單なる擬制(フイクション)又は名目(ノミナ)に過ぎないといふ、社會元子論(アトミズム)又は社會唯名論(ノミナリズム)を、其の社會認識論の出發點とする。此の思想は抑も其れの基礎たる一般認識論に於て、超越的實在論や先驗的觀念論を排斥して、認識上の與件は唯感覺のみ、而して感覺が聯想律に從うて自然的に聯結したるもののみが眞理なり、といふ感覺論を採るものであり、而して抑も吾人が五官を通じて感じる色・音・味・臭・觸感等は、てん〳〵ばら〳〵に分裂孤立せるものであるが、之と同じく社會認識に於ける感覺的與件たる個人も、各個に分立自存せるものである。而して感覺なるものは之を連續的に感じてゐる中に、終に結局快樂か苦痛かに歸着して了ふものであり、且つ各人の感覺從つて快苦は、心理上、他の何人よりも各人自身が最もよく知れるもの――各個人はエンライツンド・エゴイストである。そこで人民各個の快樂即ち幸福を增進する方法は、各人が平等に一票づゝの發言權(民主々義)をもつて、自己の幸福とする處を主張し、それの多數決によつて決するのが好い(最大多數の最大幸福主義――功利主義)。官僚とか貴族とかの特別に選ばれたと稱する階級が、他人たる處の人民の幸福を計つてやるといふことは、右の如き哲學を以てすれば、誤りであり、返つて不幸なる結果を導くかも知れぬから、人民の事は人民の自由に放任するのが好い(自由主義)といふのである。如上の感覺論、社會元子論、快樂主義、民主々義、功利主義、自由

主義といふ一聯の思想體系は、ロック、ヒューム、ベンザム、ミル等と、所謂、英國經驗學派の流の中に發展して來たものであるが、之と並行し、又は前後して發展した、良心の自由を主張するキリスト教思想や人格の自由を主張するギリシャ哲學思想もある。が然し之等もいづれも個人自由主義民主々義を唱ふる點に於て功利主義と相違はない。

此の思想は一見いかにも、人間の尊貴を主張する美しいヒューマニズムに見え、氣高い道德的雰圍氣を發揚するかに思へ、國際的にも相當の偉力を發揮するのである。卽ち英國は歐洲大戰を以て獨逸のミリタリズムに對するデモクラシーの擁護なりと宣傳して、米國の同情を惹いたり、各國のインテリ——唯美しい幻想に憧れる夢想者を引付けたが、現在に於ては之を以て國際聯盟のモットーとして、國民主義、國家主義の排擊に用ひてゐる。各人は「人間性（ヒューマニティー）」に基いて世界市民たれ、世界市民の機關たる聯盟は、各個人の自由と權利とを、專制國家の壓制より擁護せんといふのである。かくてマルキシズムが各國の勞働階級を其の國家より離脫せしめんとするが如く、聯盟は各國の個人々々をして少くとも思想上其の國家を捨てしめんとするものである。

然し協定各國はかゝるデモクラシーやヒューマニズムが空々しい虛妄であることを早くから見破つた。先づ獨逸は國際聯盟が獨逸を永遠に虐げるべきヴェルサイユ條約の利己的强行機關卽ち英佛の國策機關たることを看破した——加之最初は獨逸の加盟は許されなかつたのである。次に米國は自分が言ひ出して置き乍ら自分から加盟を斷つたが、之はいよいよそれが英佛の機關たることを鮮明にしたものである——米國人の心理には良心の直觀を宣言するピュリタニズムと利害打算に細かい功利主義とが錯又してをり、得手勝手に此の兩者を使ひ分けるのである。「デモクラシー」、「永遠の平和」といふやうなピュリタン的宣言で聯盟組織を主唱したが、打算の結果歐洲問題に捲き込まれるのが損だと分れば加盟しない。自分で言ひ出した「ロンドン世界經濟會議」（一九三三年）を、戰債問題や爲替切下問題や關稅引下問題で都合が悪くなると、自分でこはしたり、禁酒法を發布したり取消したり、東洋には門戸解放主義を唱へ乍ら米大陸ではモンロー主義を唱へたり、がそれで

ある。次いで日本は滿洲事變に際してそれが英佛米（米は加盟はしてゐないがオブザーヴァーを送つて聯盟を支援した）の在支權益擁護の利己的機關たることを發見して敢然是より脱退し、之に續いて一旦加盟を許されてゐた獨逸も脱退した。之に代つて世界一の獨裁國たるソ聯が民主々義的憲法を發布して體裁を繕ひ、佛蘭西と結託して、嘗ては「狼の栄食同盟」と罵つた聯盟の仲間入をして、いよ〳〵聯盟が對日獨國策機關たることを明らかにした。之と入れ代りに、既にエチオピア問題で聯盟の經濟封鎖に憤慨してゐた伊太利は、今や防共協定に入つて滿洲を承認するに際して、依然として不承認主義を固執する聯盟より脱退し、それがいよ〳〵英佛ソ三國協商たる實體を暴露することゝなつた。「デモクラシー」、「ヒューマニズム」などゝいふ美はしげなるスローガンも、依然として歐洲大戰前の、而してその大戰を齎らしたる利己的勢力均衡政策の僞裝に過ぎないのである。日獨伊協定も、聯盟に對抗する三國同盟たるに於ては變りはないが、それ獨特の思想を有して、劃時代的の意義を發揮せんとしつゝある——新三國同盟が墺太利の代りに日本を入れ、從つてそれが歐洲問題から世界的事件に擴大したといふ、世界史的意義の外に、日獨伊いづれも國民主義を唱へ、階級闘爭主義はもとより個人自由主義乃至は民主々義の虚妄をも曝いて、先づ思想上から英佛ソの世界支配に對抗せんとする事は、歴史に未だ嘗てなかりし新事象である。

協定各國より見れば、個人は家、社會、國等の團體より遊離して實在するものではない。成程一世紀程以前に、英國に産業革命が進行中、獨創的な企業家が、經營の自由を欲し、政府の干渉を排せんが爲に自由放任論を唱へ、先に述べた經驗派の哲學が之に歩調を合せたが、其後は漸次團體主義に變つて來て、英國に於てすら個人自由なるものは殆ど殘存せず、それは世界の夢想家を英國や國際聯盟に誘惑せんが爲の空宣傳に過ぎないものとなつてゐる。例へば勞働者は勞働組合を作つて雇主と團體交渉を爲すことによつて勞働條件の向上を計り、消費組合を作つて消費生活の合理化を計り、勞働黨を組織して其の階級的利益を政治的に貫徹しつゝあり、資本家も亦カルテル、トラストを作つて企業利益を擁護

し、保守黨を組織して自己階級の權益を主張しつゝあり、比較的個人自由主義の色彩を持續して來た自由黨は漸次解體して、勞働黨か保守黨かのいづれかに融合しつゝある。デモクラシーといふもそれは個人自由の主張ではなくて、階級的利益の主張を意味することゝなつてゐる。特に世界恐慌以後は英國々家は貿易に於ける自由主義をも捨てゝ、保護主義ブロック主義、帝國主義を强行して、國民全體經濟の維持に努めつゝあり、社會哲學もボサンケの如き國家主義が重きを爲しつゝある。此の事は米佛に於ても同樣である。殊に今度のスペイン事件や支那事變に於ては、之等の國々は世界に散らばれる自國民の權益擁護に汲々とし、各國民個人も自國々家の保護なくしては一刻も生存し得ないといふ狀態を示し、個人の獨立存在といふが如きが、如何に空言であるかを彼等自身が物語つてゐる。協定各國は此の現實を直視し、虛妄の宣傳を排擊して、自國の各個人を、國民有機體や國家組織の中に、しつかりと抱擁して、彼等の存在を完からしめんとしてゐる。其の立場は率直に國民主義であり、國家主義である。之を唱ふることによつて、自國々民の存在、而して其中に於ける各階級、各個人の存在を擁護せんとするのである。

かく日獨伊が國民主義の思想を同じうすることによつて結んだ團結に「防共」なる思想的名稱を附けたのは面白い。それは變通自在の機動性を有する。卽ちそれは先づ單なる觀念的なる思想協定乃至は文化協定たることを意味し、單にマルキシズム又はそれの宣傳機關たるコミンテルンに對する自衞團體たることを表明するので、コミンテルンなる國際機關とは何の關係もないと自稱するソ聯が論理的には何等之に對して抗議を申込んだり策動したり爲し得べき筋合のものではない。果してソ聯が策動しないとすれば、それは觀念的なる思想團體たるに終つて、何等の政治的意義をも發動するものではない。「防共」協定であるから、資本主義民主々義國である英佛は知らん顏してゐられる譯であり、況んや米國は其上にモンロー主義を固執してゐれば、世界の何處にも何等の風波は起らぬ譯である。現にブラッセル會議に於て、ソ聯代表リトヴィノフが餘りに露骨に策動せんとして、伊太利の反擊に逢ふや、民主々義諸國はソ聯敬遠政策を採つたので、ソ聯は孤立に陷つて

しまつた。若し佛蘭西に人民戰線主義が強くなつてソ聯の加擔をするやうなら、「防共」協定は其儘佛蘭西にも援用出來る譯だが、此際英國は共產主義には關係なしとして知らぬ顏してゐられる筈である。

又若しコミンテルンがソ聯政府より獨立せる國際思想機關ではなくて、同政府の側面的外交機關たる本體を暴露し、ソ聯政府がコミンテルンの政策を政治的軍事的に强行實現せんとする時は、防共協定も其の機動性を發揮して政治的に動くかも知れない――假令此の協定に政治的密約が附帶してゐないとするも。或は又情況如何によつて協定各國全部が政治軍事的に動かなくても好いかも知れない。それほどエラスチックである。又若しソ佛援助條約によつて佛がソ聯に軍事的に加擔する時、協定は軍事的にも佛ソに當り、其上に英佛同盟によつて英が佛に加擔する時は、協定の反「民主」的色調を高めて英國にも對抗する事が出來るのである――尤も獨逸は從來英國との衝突を極力回避せんと力めては來たが（特にヒトラーの『わが鬪爭』に於ては歐洲大戰前に英國を敵に廻した獨逸外交の失敗を非難してゐる。此書は一九二四年に書かれたものであるが、其後十四年間の獨逸外交振りはいつも親英的であつた）。

かくの如く防共協定が「思想」を樞軸とした點に、從つて機動的でエラスチックで、單に思想文化協定たるに止まる場合から、政治的軍事的に動く極端の場合にまで、又コミンテルンだけを相手にする場合、ソ聯一國を相手にする場合から、佛蘭西を、それから英國をも含めて相手にする最極端の場合まで、相手方の動き如何によつて、機動的、彈力的に防衛行爲に立廻ることが出來る點に、劃時代的の新味がある。米國が歐洲大戰時の經驗に懲りて、再び歐亞の問題に干涉せざる限り、又そのモンロー主義は一切の思想問題に關係なき汎米協調主義だと自國民を敎導する限り、斯國は完全なる中立を維持することが出來る立場にあり、またその實力をも有するのである。

防共協定は右の如き多面性を有するものであるが、以下獨逸を中心とする防共思想を簡單に分析してみたい。

二

マルキシズムとは何であるかは今となつては容易に捕捉し難い。それはマルクスによつて始唱せられ、エンゲルスによつて擴大せられ、以後マルキシストによつて祖述せられ、修正派對正統派等々の永い論爭を經て發展して來たが、大戰中ロシア革命派の手に移つて實現せられたものが、眞正マルキシズムと云はれてゐた。然しそれも束の間、永久革命論はトロッキズムとして排斥せられ、其他ブハーリン說もラデック說も――凡そ今迄マルキシズムの經典と仰がれてゐたものが、殆んど凡て次々に否定彈壓せられ、今や「スターリンの言ふ處眞、言はざる處僞」といふ思想上の專制主義が行はれてゐるので、何がマルキシズムなりやはスターリンに聞くの外はない。然しそのスターリンすら現實政治の必要に迫られて、昨日の眞は今日の僞、旦に排擊した社民主義や民主々義も、夕には門を開いて歡待するといふ有樣だから、益々何がマルキシズムなりやを捕捉し難い。然し乍ら、原始マルキシズムは一定の確固たる原理の上に組立てられたる圖式であるから、その圖式主義に合するものが眞正マルキシズム、然らざるものは一時の權宜或は誤謬として取扱ふことが出來る。

マルキシズムの圖式乃至は公式に就いては今更多言を必要としないが、現下の防共協定問題に關聯する限り次の如く二、三の點を拾ふのを便利とする。先づそれは唯物論であつてヘーゲルの如き理念論、其他一切の精神論に反對する。精神は物質の反映であり、意識は存在が決するものである。然し十八世紀佛蘭西の唯物論や十九世紀獨逸の物質一元論の如き自然科學的唯物論と異つて、マルキシズムの唯物論は歷史學的社會學的である。即ちその所謂「物資」は「經濟」であり、而してその經濟概念も單に慾望の充足といふが如き自然科學的概念と異つて歷史的社會的概念であり、從つて經濟とは生產の歷史的社會的關係、詳言すれば生產要具乃至は資本の「所有關係」を意味する。かゝる所有關係が一切の思想、文化――即ち宗教、哲學、藝術、法律、政治等を決定する基礎であり、從つて後者

卽ち上層建築物一切の歷史は其の基礎構造たる所有關係の變化するに從つて流轉する。然るに所有關係に於ては必然的に有產階級と無產階級に分れ、兩階級は必然的に階級鬪爭を惹起し、而して多數の無產階級が常に少數の有產階級に打克つが故に、所有關係は必然的に變化し、そこに歷史は發展する。歷史とは所有關係の變轉卽ち階級鬪爭の歷史である。而してヘーゲルが歷史は、理念の辨證法的三段階的自覺（顯現、發展）形式に從つて、發展すると唱へたに對して、マルクスは其の理念に代ふるに經濟を以てし、而してその辨證法のみは之を採つて、歷史は經濟の辨證法的發展公式に從つて發展すると唱へた。

この經濟の辨證法的發展公式卽ち經濟史發展段階說は、マルクスの原形に種々改訂が加へられたが、現在では次の如く說かれてゐる。

（一）何人も資本を所有せず、資本（土地、獵具）が共有に屬せし時代——原始氏族共產時代。

（二）資本（土地）を貴族乃至は武家僧侶が所有し、奴隸乃至は農奴を搾取せし時代——古代、中世の地主經濟時代（此の古代と中世とを二段階に分ち、第（一）を段階前に置いて三段階的圖式を作る人もあるが、貴族も武家も共に土地の所有者であつて兩者の間に一段階を劃する程の發展がない。成程無產者の側から云へば、兩時代の間に奴隸から農奴卽ち身分から云つて不自由から半自由へ發展したけれども、それは身分上の發展であつて、經濟上卽ち所有關係上の發展ではないから、一段階を劃する契機とはならぬ。成程農奴は僅少の不動產の所有は許されたが、それは資本ではないので、「所有關係の變轉」ではない故に貴族經濟時代と封建時代とを地主經濟時代として一段階として第二に置き、原始共產時代を第一に置き、第三を資本家時代とする方が辻褄が合ふ）。

（三）資本を資本家階級が所有し、自由勞働者を搾取する時代——近世資本主義時代。而して此の最後の段階を更に細分して(1)商業資本主義時代(2)工業資本主義時代(3)金融資本主義時代となし、金融資本主義の爛熟する所、各國の銀行集中（五大銀行）現象に見るが如く、金融は少數者の手に獨占せられ、此の少數金融家が一切の產業のヘゲモニーを握つて

獨占資本主義を完成し、進んでは此の經濟を基礎として、其の上層物たる政治に對してもヘゲモニーを握つて金融寡頭政治を現出し、延いては外交軍事をも左右する。然るに國内に於ては少數の金融資本家は、搾取の結果窮乏化せる無數の無產者階級より、もはや高率利潤を擧げ得ざるを以て、國外の植民地半植民地に投資市場を求めて進出する。是れが帝國主義段階である。然るに諸資本主義國の間には先進後進の不均衡關係が存し、先進資本主義國は既に世界の大部分を植民地又は勢力範圍として獨占せるが故に、玆に後進資本主義國は植民地再分割を求め、其の聽かれざるや必然なるが故に、必然的に資本主義國家間に帝國主義戰爭が起り、植民地は反帝戰爭を起し、而してかゝる外戰の間に國内にはレボリューション が起つて無產者の勝利に歸する。此の過程が又三段階に分たれ(一)帝國主義段階、(二)プロレタリア・ディクタツール段階、(三)「フリー・キングドム・オブ・コンミュニズム」段階と圖式化されてゐる。而してマルキシストは此の公式を現代に當てはめて、歐洲大戰を如上の帝國主義戰爭となし、其結果各國の資本主義は沒落し、第二第三の段階が實現すると豫言したのである。然るに大戰中又は其後に革命の成功したのは露西亞に於てだけであつて(而も當時の斯國に於ては金融資本主義が段階說に當てはまるほど爛熟してゐなかつたので露西亞革命を嚴格にマルキシズム革命と稱することを得ないが、假にさうとしとくも)、他の各國に於ては一時革命的現象を生じただけで、いづれも反革命の方が成功して右の豫言は外れて了つた。玆に於てソ聯も永久革命論を棄てゝ、之を唱ふるトロッキーを彈壓し(一九二四年)、レーニンの唱へた「一國社會主義建設可能論」を採用して、一九二七年より之を五ケ年計畫として實現しつゝ、其の影響を逐次他國へ及ぼさんと窺つてゐた。時なるかな二九年より世界恐慌が起つたので、直ちに之を一般的革命的危機時代として捉へ、又次の如き三段階的圖式を設けた。先づソ聯自身に就いては(一)戰時共產時代(一九一八—二一年)、(二)新經濟政策時代(一九二一—二六年)、(三)社會主義建設時代(一九二七年以後)といふ段階を建て、自らは此の第三段階が着々として進行し、既に第一期五ケ年計畫は一九三二年に完成して、ソ聯の農業國よりの工業國化、輕

工業國よりの重工業國化、軍需工業の確立、農業の機械化並びに電力化、凡ての部門に於ける社會主義化が完成したと宣傳し、一九三三年度より第二期五ヶ年計畫に入りて、消費財の生產を豐富ならしめ、一九三八年度より第三期五ヶ年計畫に入つて凡ての部門の整理並びに財貨の品質の向上を計ると稱してゐる。而して次の段階では全部の國民が無產者となるので階級の差別は撤廢され、無產者の階級支配は解消し、階級支配の機關たる國家も自然死を遂げて、自由王國が實現するといふのである。五ヶ年計畫が宣傳通りには成功してゐないことは、ジイドの旅行記や其他の旅行者、新聞記者等のニュースによつて明らかであり、又頻々たる彈壓沙汰が國內に於ける新對立の激化を物語つてゐるが、ソ聯政府やコミンテルンは今や經濟的にも軍事的にも國力が充實したので、進んで他國を一つ〳〵社會主義化する段階に入つたと稱する。而して此の他國乃至は世界一般の戰後の歷史にも段階を建て、（一）革命的騷亂時代（大戰直後卽ち一九一八—二三年）、（二）相對的安定時代（一九二四—二八年）、（三）一般的危機時代（一九二九年以後）となし、目下は此の第三段階の帝國主義戰爭、革命的騷亂の再發期であると稱し、滿洲事變、エチオピア戰爭、スペイン內亂、支那事變等を凡て此の段階のカテゴリーに入れて說明するのである。

かゝる抽象的普遍的段階說の誤謬を指摘することは後に讓る。が、かゝる段階的發展は彼等の唱へる所に反して、辨證法的必然的には生じないことを自ら知つてゐるので、コミンテルンは意識的に努力的に無理矢理に他國を戰爭、內亂、革命に引づり込むことを始めた。卽ち一九三五年の七、八月に亘るコミンテルン第七回大會（五十七ヶ國より六十五團體の代表五百十名出席）に於て、ファシズム反對・人民戰線結成（フロン・ポピュレール）といふ戰略を建てソ聯の自國防衛及び他國の攪亂に進出することゝなつたのである。

此の結果は的確に顯はれた。フランスに於ては人民戰線內閣が成立して、左右の對立が激化し、スペインに於ては慘澹たる內亂となり、支那に於ては西安事件を契機として日支事變に發展したのである。此の戰略が恐るべき點は、それが獨り各國の「眞正マルキシズム」を奉ずる階層を動かすのみならず、從來は仇敵として攻擊して來た微溫的なる社會民

主々義や資本主義的民主々義を信ずる多くの階層をも抱擁獲得する點にあり、その變化流通自在の戰法にある。卽ちそれは各國の勞働階級、中小商工階級、知識階級、自作農をも含む農民階級を大同團結せしめて鬪爭を激化せしめる。外交方針としては資本主義國一般を攻擊することを一時止めて、專ら日本と獨逸とに鋭鋒を集中し（伊は其次の段階に置かれてゐる）英佛米は寧ろ之を抱き込んで對日獨戰線に用ひんとし、既に一九三四年に國際聯盟に加盟してゐたが、三六年には表面民主的なる憲法草案を公表して民主々義諸國の歡心を買ふ等凡ゆる手段を講じたのである。玆に於て此の危險に對して、日本と獨逸とは三六年末に防共協定を結んで之に對抗し、伊太利は三七年末に之に加盟して、反民主々義的色彩をも鮮明するに至つたのである。以下其中の獨逸の防共思想を簡單に分析しよう。

三

獨逸の防共思想――それはナチス思想の一側面を爲すものであるが、ナチスの思想は今尙生成の過程中にあり、ヘーゲル哲學のやうに知識論から歷史哲學、社會哲學、國家哲學に至るまでの組織化が完成してゐる譯ではなく、多くのナチス黨員達が、それ〴〵擔當部門について敎示又は宣傳を行つてゐるに過ぎない。我々は其等の多くの資料からナチス思想體系を編成しなければならないのであるが、其れは後の機會に讓つて、玆には防共思想の一面を發展史的に捉へることに止めておきたい。

敗戰、革命的擾亂、苛酷慘虐なるヴェルサイユ條約と國際聯盟規約、ユダヤ人的マルクス主義的政治、インフレーションと國民生活の疲弊困憊、意氣銷沈と道德的頽廢――かうした中から、獨逸魂の再燃と國民生活の再建を叫んで立ち上つたヒトラー及びナチスの黨員たちにとつて、最先に指導目標となつたものは、「血と土」(Blut uud Boden)の再意識である。再び獨逸民族の血緣的結束を固め、それを父祖の土地の上に確固たる共同體として再建せねばならぬ。時しも、軍備を奪はれ、兵役制度を禁止された獨逸にとつて、靑年の鬱憤を發散し、活氣を發露する唯一の方法はかのヴァンダーフォーゲル Wander-Vogel

の運動であつた。誰が云ひ出したともなく、いつの間にか、青年男女が二十人三十人と群を爲して、マンドリンや笛やらの伴奏で、古い獨逸の民謠などを唄ひながら、村から村へ森となく野となく歩き廻はり、疲るれば村人によつてしつらへられたヒュッテに泊り、覺めれば又唄ひ歩くのである。かうした間に彼等の胸に自然的に、同胞と故郷（Volk und Heimat）の傳統的、歴史的感情が再燃して來た。最も古い南獨逸の都、ミュンヘンで僅か六人の同志から始まつた（一九一九年）ナチス運動も、かゝるヴァンダー・フォーゲルと同じ感情の流れに流れつゝ、此の血と土との歴史的觀念を確固たる旗印として、失はれた獨逸民族の共同體生活と其の故郷とを奪回、再建せんと立ち上つたのである。從つてナチス思想の出發點は論理的思惟ではなくて、歴史的感情又は歴史的認識である。近頃の獨逸法律學の體系は、第一章に法律史が置かれ、昔は法律哲學が置かれたのと大いに出發點を異にしてゐる。

このナチスの發足點を歴史主義（Historismus）といふことが出來るが、然し此語は隨分缺陷の多い言葉であつて、左の如き註釋を要する。先づ歴史主義なる語は普通「在りしものは正し」、「古きものは良し」等、存在卽價値、Sein 卽 Sollen とする思惟方法と解釋せられるが、ナチスに於ては昔の獨逸の民族的結束と土地とを價値と見、之を奪回せんとする點だけに於て、歴史主義なのであつて、何でも在りしものは良しとする無反省なる傳統主義ではない。況んや戰後のワイマール共和國憲法下に於ける、又ストレーゼマン內閣下に於ける、獨逸國內の諸傳統の延長を計らんとするが如き、傳統主義とは正反對である。此の憲法上に於けるユダヤ的、マルクス主義的、國際主義的獨逸を顚覆せんとすることこそナチスのアルファでありオメガなのである。從つて一九三三年に於けるナチスの內閣組織がナチス「革命」と稱せられる所以なのである。

又右の數行で既に明らかなる如くナチスの歴史觀とマルキシズムのそれとは著しく異る。マルキシズムの抽象化的普遍化的歴史觀は實は歴史の自然科學化乃至は形而上學化であり、生きて動く歴史を固定化形式化するものであり、云はゞ歴史を殺すものなのである。

例へば宗教戰爭を見ても、ナポレオン戰爭を見ても、歐洲大戰を見ても、其等の夫々獨特の個性を捨て去り、其等に共通の普遍的抽象的要素たる征服慾鬪爭力の如き一原因を採り、それの分量的作用の結果として、此等諸現象を一樣に、因果法則を以て說明し去る方法は、疑もなく自然科學的觀察方法であつて、ナポレオン戰爭も歐洲大戰も凡て、同じ征服慾の結果たる現象であり、そこに「何か新しきもの」(Was Neues)、「新たに追加せられたるもの」は發見することが出來ない。自然科學方法は一切のものを同一法則に當てはめて觀察するもの、動くものを靜止せしめるもの、新しきものを古きもの、繰り返すものとして觀察する方法である。之に反して歷史觀とは新しきものを新しきものとして觀察し、我々の過去に何等か違つた現在が附加はるものと認識すべきもの——然らずんば其れは自然科學であつて特殊獨立に歷史學などゝ呼ばるべきものは存在し得ないのである——とすれば、マルキシズムの歷史觀は實は歷史を抹殺するもの、歷史學の自然科學化なのである。又彼等は唯物史觀論は機械的因果法則を求めるものではなくて、辨證法的法則を求めるもの、此の法則は物の量的變化の外に質的變化をも把握するといふけれど、然し其の法則が正、反、合といふ合理的三段階に形式化されてゐる限り　凡て動くものが此の型の中に固定化され質は量化され、生けるものが殺されるのである。眞に新しきものを新しきものとして觀察せんには、一切の合理的法則や公式を捨てゝ直觀的個性把握に依るの外はない。常に新しい立場に立つの外はない。そこに何等かの因果法則を求め得べしとするならば、それは左右田博士の所謂個別的經驗的因果律のみである。

かくてナチスは獨逸にも亦、金融寡頭政治から、資本主義の沒落、無產者の獨裁、共產主義の自由王國が生ずるといふが如き、辨證法的抽象的普遍的公式を以て獨逸史を見る觀方を排斥し　況んやそれを政策的に實現せんとするが如きコミンテルンの策動を排擊し、此の策動に乘つて赤化せんとする人民戰線諸國などから獨逸を防衛し、獨逸は獨逸自らの新しき獨創的なる未來を作らんとするのである。さればナチスの歷史觀は抽象的普遍主義ではなくて具體的個別主義である。合理主義ではなくて直觀的本質把握主義である。玆に

現象學的哲學が消化されてゐる。

さればナチスはマルキシズムの唯物論を排斥して精神主義を採るけれども、それは獨逸魂の振興といふが如き實踐的情熱的意味に於てゞあつて、決してヘーゲルのいふが如き合理的形而上學的意味――精神が宇宙の本體であり、それの自覺の形式が辨證法であり、自然・社會・歷史・文化等の現象は、精神が辨證法的に自覺し顯現せるものといふが如き意味に於てゞはない。ヘーゲル哲學は一面において獨逸文化をば、希臘、羅馬の二前段階を止揚して、辨證法的に發展せる、第三の最高の綜合的段階に達せるものとし、又獨逸の立憲君主國制は、東洋の專制國家（一人の自由、爾餘全體の不自由）、希臘羅馬の貴族國家（少數の自由、多數の不自由）の上に、辨證法的に發展せる所の、全體の自由を實現せる處の、最高の國家なりといふが如く、獨逸主義を包含してナチス思想に合致するものであるが、然しナチスは、ヘーゲル思想の凡ての基礎を爲す所の辨證法なるものが、合理的、固定化的必然的法則であり、從つて人間の努力を無視する機械論に陷る點――而してマルキシズムの必然的辨證法は其の延長である――を排斥して、寧ろフィヒテの努力の哲學、ニイチェの意志の哲學の如き生々潑剌たるものを採り容れてゐる。

かくの如くナチスの歷史觀は具體的個別主義であつて、何等の傳統主義にも墮せず、又獨逸の前途が自然科學的辨證法的法則によつて必然的に共產主義革命に陷るものと看ず――否、その革命らしいものは既にナチスが克服した――、唯過去の中に、未來の建設の出發點となり基盤となる價値あるものを直觀的に把握して、その上に新しき獨特の獨逸を建設せんとするものである。而して先づその過去の中に發見したるものは民族の共同體生活（ゲマインシャフト・レーベ）と其の鄉土（ハイマート）であり、之を取戻さなければならぬのである。然るに戰後の獨逸は其の共同體は解滅に歸し、ユダヤ人やインターナショナル・コンミュニストやインターナショナル・デモクラット卽ち國際聯盟主義者などが橫行し、階級鬪爭や個人生存競爭が渦卷いてゐる。前者に對しては上述の如く思惟方法上之を排擊すると共に力を以てする衝突によつて之を克服したが、後者卽ちデモクラシーに對するナチスの思想的態度を見なければならぬ。

デモクラシーの思惟方法は先に述べた如く、社會的實在は個人であり、社會其者は實在にあらずして名目であり、而して感覺的個人は啓蒙的利己主義者であるが故に、自己の幸福を最も良く知るもの、從つて各人に平等に一票の發言權を與へて自己の幸福を主張せしめ、その多數決を社會規範、國家の法規とする時には、最大多數の最大幸福が實現せられる――之が即ち彼等の感覺論的個別主義によれば國民全體の幸福であつて、ミルの抗議にも拘らず、少數者の存在價値は認められないのである。かくの如く個人が聰明なのであるから、國家は何等人民の指導者、教育者たる立場を採る必要がない。單に人民多數の決議たる法規を記錄する登記人たり、もし人民間に悶着が起れば此の法規に照して審判すれば足りる、即ち文化國家にあらずして法治國家である。人民各個は聰明なる自己認識に基いて、己が長所とする所を自由に競爭的に分業し交換する所に、個人各個のみならず、國民全體の幸福が結果するのである。其處に優勝劣敗が起るが、それは自然陶汰の法則であつて止むを得ない――但し現代民主國家は此の劣敗者を救はんが爲に手厚い社會政策を施行してゐるが、それは自然的競爭的に決定する國民的水準よりの脱落者を憐むといふことに過ぎないのである。ナチスの社會的國家思想は之と異る。

ナチスの社會的認識に於ては始めに分裂孤立せる個人は實在せずして、國民的共同體の一員としてのみ個人が實在する。個人の感覺、思惟、意志は凡て國民全體のものであり、個人の生活とは國民の全體生活を自己の角度に於て生きることである。たゞし理想主義者であり乍ら空想的ではなくて同時に現實主義者であるナチスは、國民各個が直ちに右の如き、自己の地位――有機的全體に對する部分の關係――を自覺せるものとは考へず、況んや社會主義に於けるが如き無產者崇拜の如きものを持たない、寧ろヒトラーの「わが鬪爭」は屢々民衆の暗愚を指摘してゐる。

然し乍ら其の國民こそ國家の本體であり、國民共同體の復興こそナチスの目標なのである。玆に於て黨の存在が必要不可缺となつて來る。黨員はかゝる國民意識に覺醒せるものであり、從つて無自覺の或は錯覺せる國民を「超越」せる指導者である。がしかもそれと

同時にその國民の中に「內在」し融滅せる國民自身である。國民各個は本來國民意識を本具せるものであるが、目前の快苦の感覺の迷蒙に囚はれたり、マルキシズムやデモクラシーの宣傳に迷はされて錯覺に陷るものである。故に黨員はかゝる國民の中に內在する一員であり乍ら、然も炳乎として國民意識を自覺せる超越的優者として、國民の迷蒙錯覺を吹き掃つて、本來の國民意識に立歸らしめる指導者の役割を勤めるのである。かゝる「超越的にして同時に內在的」といふ考へ方は、カントに於ける先驗的觀念卽ち範疇が感覺を超越せるものであり乍ら、その感覺を內在的に規制するものなると同じく、獨逸思想史に歷史的に根ざせるものである。而してヒトラーはかゝる黨の黨首、卽ち、最高指導者（Führer なる語は特にヒトラーのみに用ひられる）であるが、彼も亦國民を全然超越のみせるものに非ずして、同時に又國民の中に內在せるもので、獨裁者であり乍ら國民意識乃至は國民總意其者を、最も直接正確に表現するもの、眞の意味に於て最も民主的なるものである。「一個人が全體を代表し表現する」といふ思想は、ヘーゲルに於て立憲君主制が全體の自由を表現するといふが如く、獨逸の團體說史に歷史的に流れてゐる思想である。英米流の民主々義に於ては國民の總意は其の代表者の發言の數學的合計によらねばならぬが、第一其の代表者が眞に民意を代表するか——自己の意志を以て選擧者の意志に代換することなきかは保證の限りではない。嘗てルソーも英國の代議制度は眞の民主制度にあらず、選擧人は選擧中は自由であるが、それが濟めば奴隷になる、故にスパルタに於けるリコルゴスの如き獨裁的立法者が却つて國民總意を表現すると云つた（拙著、社會哲學史研究參照）。佛蘭西の議會制度が動搖極りなく、英米に於けるそれのやうに固定しないのはかゝる思想が佛人に內在するせいであらう。第二に議會制度に於ける決議は常に多數決によるものであるが、多數者の意志は國民全體の總意ではない。假令滿場一致の決議、卽國民全體の一致が得られる場合がありとするも、それが「正しい」總意であるか否かは保證できない——盜賊の滿場一致なるものもあり得る。迷蒙錯覺に陷れる國民全體の總意は正しからざる總意で無價値である。「正しき總意」は指導者の指導によつて啓蒙されたる後の國民の全部

の意志でなければならぬ。然し此のことはルソーもいふ如く、「民主制の謎」（敎へられるものが、敎へられて後始めて達する所のものへ、敎へられる前に豫め達してゐなければならぬ、何となれば指導者は高邁の言を用ひるから容易に民衆に理解されないから）であつて、容易に實現不可能のことであるから、獨裁者個人が却つて「正しき總意」を代表し表現し得ると考へるのである。かくて指導者は國民の上に立つ超越者であり乍ら、同時に國民其者なるが故に、支配者と被支配者の對立が解消して、渾然たる有機的國民共同體が實現出來るのである。ナチスは曰く、凡そ國內に對立抗爭的の者があつてはならない。階級の鬪爭があつてはならない——唯一の協同する生產階級あるのみ。又民主々義國に於けるが如き個人競爭や政黨の對立があつてもならない——凡ての個人は國民全體に融合すべく、政黨は唯一つナチス黨あるのみである。獨逸國內に、「國家內の國家」的存在たる各邦の對立があつてはならない——完全なる中央集權的獨逸國家あるのみ。

右の如くナチスの思想は、獨逸歷史の中より直觀的、本能的に價値あるものを把握綜合して、獨逸再建の爲の礎石となさんとしつゝある。此點に於てナチスは我國の家族的國家思想が連綿として歷史的に永續し、而して國民各自が本能的に之を自覺せるのを羨み、獨逸國民に日本歷史の研究を勸め、我國に接近せしめんとつとめつゝある。

かくてナチスは先にマルキシズムを思想的にも實際的にも克服した如く、英米の如きデモクラシーをも獨逸にそぐはぬものとして排斥し、思想上に於て獨逸獨特の國民的國家主義を採る一方、實踐的にもデモクラシー國の聯合體たる國際聯盟を脫退し、聯盟規約を破棄して、軍備を擴張し、ラインランド卽ち獨逸人の故鄕を取戻し、尙多くの土を要求すると共に、獨逸人の血の關係を取戻さんが爲に、汎獨逸主義を主張してゐる。次いで、マルキシズムがデモクラシーと抱合して人民戰線主義となつて恐るべき偉力を發揮せんとするや、いよ〳〵我國と思想協定を結んで、獨逸の個性と生存とを外交的にも擁護せんとするのである。

——昭和十三年十二月二十七日稿——

結論

對日經濟斷交と日本經濟の進路

一

去る七月下旬、日・佛印共同防衛協定が成立すると、忽ち米英系諸國は、報復手段として、在米英、日本資產を凍結したり、通商條約を破棄したり、殆んど經濟斷交といふ瀬戸際まで進んで來た。開國以來、英米の支配する世界經濟體制の一環として、發展して來た日本經濟は、玆に根本的の轉換を試みねばならぬ秋に際會したのである。

その轉換の方向はいふ迄もなく、共榮圈の擴大による資源の確保と、技術の進歩による增產にある。

先づ日滿支共榮圈が「大東亞」共榮圈に一歩擴大されて、佛印が完全に此の中に包含され、泰國も一部分之に參與(七月末日對日千萬銖(バーツ)＝千六百萬圓貸與、八月初日滿洲國承認)したので、一寸樂になつた。何よりも米を〇萬石以上輸入し得る可能性が生じたので、水害・冷害の現下、最も有難い。

去る八月一日夜のラジオ常會に於ける、井野農相の「食糧問題と戰時生活」と題する放送に依れば、現下の日本の米穀事情は次の如くである。即ち米は事變前までは、內鮮臺を通じて、年平均九千萬石乃至一億萬石の收穫があり、之を以て大體自給することができたのであるが、その後一方には戰時の消費增加があるのに、他方では勞力、肥料、資材、石油、輸送等手不足及び二年に亙る旱魃、病蟲害等の爲に生產減少となつて每年相當多量の米不足の現象を生じて來た。玆に於て政府は（一）米の國家管理（昨年內地產六千八十萬石の中、三千五、六百萬石を管理し、其中約千七、八百萬石を買上げた）、（二）消費規正、（三）外國米の輸入、（四）增產（七千百萬石へ）等の米穀政策を建てたが、本年は雨量過多で、增產計畫の成功が疑はしい際、多量の佛印米及泰米の輸入が可能となつたのは、何よりも心强いのである。又わが國のみならず、滿洲、支那も食糧不足で困つてゐるのであるから、佛印米及び泰米を我國の技術によつて、大增產をやる必要があるのである。

それにはメコン河や紅河(ソンコイ)や、或は泰のメナム河の、上流山間の適處に、堰堤を設け、貯水池を作り、そこから水量を平均的に流下することによつて氾濫と旱魃を無くすることが第一である。北朝鮮に於ける朝窒の仕事のやうに、大水力發電と大電氣化學工業を起して硫安や石灰窒素を作れば、ますます米の增產が可能である。又かゝる雄大なる科學的事業を我々の手でやつて見せることによつて、始めて眞實の異民族の尊敬や信賴を買ふことができるのである。渡航する日本人は、かゝる電氣事業や、化學工業、鐵鋼業、機械工業、汽車、汽船、自動車工業等の重工業、輕金屬工業、鑛山業等に、後進國民の企て及ばざる

大事業に集中すべきであつて、目下の如く小賣商人、小職人、理髮屋、車夫、娼婦の類まで出かけるのでは、ます〳〵輕侮を買ふのみで、東亞の盟主も何もあつたものではない。重工業で云ふなら鋼材まではこちらで作り、鍋釜類は土着人に作らせ、小賣も彼等に任すべきである——模範的大デパートの外は。纖維工業でいへば科學的技術によつて大量生產される糸か原料布までではこちらが作り、異民族向の加工布は彼等に任すべきだ。

これは共榮圈內の職業政策にまで脫線したが、米にまで戻つて云へば、佛印米と泰米を押へると、シンガポールや香港の食糧を脅やかすことができる。蓋し、米は支那と印度が世界最大の生產地だが、人口尨大の爲に輸出餘力なく、蘭印も佛印に次ぐ生產國だが、矢張り輸出餘力が無い。輸出餘力のあるのは、佛印、泰、ビルマの三國だが、ビルマだけで到底シンガポール、香港その他南洋の需要を滿たすことができないので、吾人が佛印米及泰米を掌握する時は、英米の對日經濟斷交に對する一つの報復ができるのである。報復は東洋の君子道としては恥ずべきだが、目前の白人の執拗なる、「目には目を、齒には齒を」式の報復に對しては、逆報復を以てするの外は、彼等を訓へる道がない。之も一の方便であらう。

又彼等はいざといふ時は、蘭印の石油坑を燒却破壞すると、天人共に許さゞる暴虐行爲——白人がアジアの資源を以て、我々を脅かしてゐるが、之に對する訓戒も逆報復による の外ないとすれば、燒夷紙——英國飛行機がテルミットを塗つた紙を蒔いて、獨軍占領の西歐地方を燒いたといふ——を以て、蘭印、マレーのゴム林に撒布したくなる。年產五、六百萬臺といはれる米國の自動車工業は忽ち滅亡して、米國戰時經濟は混亂に陷るであらう。英米蘭人よ、自己生存せんと欲すれば、他國民をも生存せしめよ。「汝のせられんと欲する如く隣人にせよ」といふ、キリストの訓こそ、キリスト教を口にする御方が實行すべきではないか。

それにしても皇軍が佛印に進駐したのは、決して積極的侵略意志等によつたのではない。我國民は屢次の近衞聲明にある如く、英米の經濟壓迫のある限り、大東亞廣域經濟圈を平

和的に建設して、東亞の在住民族と共に共存共榮の生活を營まんと欲するの外、他意ないのであるが、英米重慶蘭（ABCD）同盟が、佛印・泰を包圍し、「極東危機說」を以て之等を威喝し、今にも侵占せん許りの態勢を示してゐたので、シリアを占領せし英人の暴虐に激怒せるフランス本國のヴィシー政府が、我軍に進駐を依願したのである。同樣の脅迫に逢へる泰國も同樣の依願を我國に向けるであらう。然らば今こそ逡巡することなく××××し、その最南端たるシンゴラ邊りに、×××××××××××××××××××××××××蘭印と石油交渉をした方が却つて交渉に成功するかも知れん。蘭印が石油を東亞へ供給しさへすれば、東亞に戰爭は無い。蘭印自身も東亞も平和なのである。即ち石油〇萬噸ほど入手することを得れば、我國は大東亞共榮圈の戰時經濟を略々賄つて行くことができるのである。然るに蘭印やソ聯が米英の手先に踊ることこそ最も愚かなる結果を惹起するのである。如何にこのアングロ・サクソンの吹く笛が多くの國民を亡ぼした事か。さて食糧問題の殘部に就いて見るに、前記井野農相によれば、小麥は目下千萬石、大麥及び裸麥は千三百萬石の收穫があるが、前者を七千百萬石に、後者を千四百萬石に、其他甘藷及び馬鈴薯を二十一億萬貫に增產すべく努力中である。尙玉蜀黍は大量に佛印より輸入することができる——勿論云ふ迄もなく、すべての輸出入は船舶、燃料が充分なること、制海權が確保されてゐることを前提とするが、之が可能なりとすれば、東亞の食糧問題は先づ〳〵解決することを得るであらう。米の輸入代金支拂に關しては、佛印は一年間のクレディットを、泰は上記の如く一千萬銖の借款を、日本に與へたのであるから、當分は心配ない。その間に輸出品を以て、辨濟すればよい。

二

次に重工業系統の情勢を見るに、米國の屑鐵はもとより、今や馬來及び比島の鐵鑛も輸入できぬことになつたが、その代り佛印に可成り良質の鐵鑛が、可成り豐富に發見せられたので、儲けものである。のみならずその近くの海南島にも、田獨鐵鑛の埋藏量は六七%

平均四億瓲といはれてゐたが、最近の測定では〇〇億瓲といはれ、非常に有望である。之等と同じく海南島の石碌鐵鑛、中支の大冶、北支の龍烟（若くは之を原料とする北京郊外石景山の銑鐵）等の良鐵鑛を、內地に運べば鑛石はどうやら間に合ふであらう（いふ迄もなく輸送機關が充分でなければならぬが）。內地はその他に、內地の貧鑛や砂鐵を高周波電氣爐や、普通の電氣爐や、廻轉爐（その一部はセメントのロータリー・キルン）を以て、處理して鐵鋼を得つゝある。日本ニッケル會社は秩父の蛇紋岩を廻轉爐と電氣爐とを以て精煉して、フエロ・ニッケルを生產してゐる。鐵としてもニッケルとしても貧鑛で、それらそれ〴〵の單一では採算ができぬものを、合金たる含ニッケル特殊鋼を採ることによつて採算成立つといふのは、賢明なる發明である。大江山ニッケルもその他の會社も、類似の方法を採るやうになつた。かゝる誇るべき技術の發明は、大いに褒賞すると共に、一刻も早く技術を公開せしむべきである。此の方法が擴まれば、佛領ニューカレドニアのニッケルが、英米の制海權に抑へられても、大して困らないのである。

又、佛印に燐灰石が出るので、臺拓南拓等が早速採掘にかゝつたが、それから直接に火藥や過燐酸石灰を造る外に、之を銑鐵と共にトーマス式鹽基性製鋼爐で處理して鋼鐵を採ると共にトーマス燐肥を得ることは出來ぬか。さすれば屑鐵の不用な製鋼法が、我國を米國より獨立せしめるのである。佛印の燐灰石は老開の方面に產出し、輸送機關が極めて不便なので、わが鐵道技術が入り込む必要がある。北朝鮮の端川近傍にも燐灰石が出る。

その他朝鮮では、上記高周波電擊製鋼法が、城津に於て、朝窒の低廉豐富な電力を以て行はれてゐるが、之はますます擴大すべきである。最近鴨綠江水豐ダムの發電も、朝窒の技術で一部分完成したが、之は全部滿洲國に供給せられ、鞍山變壓所で、鞍山火力發電と連結されたが、そこでも大いに電氣製鐵と電氣化學工業をやるべきであらう。尙朝窒ではその豐富なる電力で、マグネサイトからマグネシウムを精煉してゐるが、その殘滓が加里肥料になると。

朝鮮の茂山の三〇%臺の貧鐵鑛は、磁力選鑛によつて粉磁鐵鑛となつて淸津の三菱製鋼

所に運ばれ、そこでヨハンゼン式の廻轉爐でルツペ（粒鋼）に作られてゐるが、この特許は日鐵とも共同で購はれたので、清津の日鐵でも、又鞍山の昭和製鋼所でも此の方法が、一部門として採用せられてゐる筈である。此のルツペは品位九十數%あり、屑鐵代用品となるから尊い。技術の進歩によつて、東亞の貧鑛や劣惡資源をますます多く利用できるやうにしなければならぬ。而してその技術は、一社によつて獨占することなく、相當の報償を受けて、全般に公開傳授し、此の超々非常時に、一刻も早く、優良品の增產を計らねばならぬ。

製鐵等に必要な石炭も、佛印が共榮圈に入つたので、大分樂になつて來た。卽ち有名な良質無煙炭たる鴻基（ホンゲイ）炭は、粘結性が强く製鐵用コークス製造にも適するので、大いに增產し輸入しなければならぬ。東亞の海濱に於けるもう一つの粘結炭は、北支の開滦炭であるが鴻基炭を今迄よりもより多く輸入できれば、開滦炭を鞍山にもつと多く廻せるのである。千三百二十億噸ありといふ、蒙疆地方の石炭も、早く便利な鐵道を敷設することによつて、もつと多く利用することを考へねばならぬ。今の處製鐵用としては、山西諸都市の小製鐵所や石景山鐵廠で用ひられてゐるに過ぎないが、せめて石景山をもつと擴大して、良質無限の蒙疆石炭と可成り良質豐富の龍烟鐵鑛とをもつと利用すべきである。

中支、揚子江畔、大冶の鐵鑛は、一部分我國に輸出された外は、浙贛線上の長沙に近い萍鄉の石炭と合せて、漢陽の漢冶萍鐵廠で製鐵してゐたのだが、全部蔣匪によつて破壞せられた。もうそろ〳〵修理は成る時分であらう。

滿洲、北支、中支の製鐵の傍には、そろ〳〵重工業工場を建てゝ、現地で必要な武器や車輛や簡單な機械等を作つて、現地に配給し、一々日本內地へ原料を送り、製品を受け出すといふことを止めねばならぬ。內地は漸次最精密な重化學工業品を專門にして行くべきである。

尤も人絹やスフの如き化學工業兼纖維工業は、用水の硬度や、パルプ產地の關係上、日本內地でなければ營み得ない。而して之こそ日本から大東亞共榮圈へ輸出すべき最適品であ

る。尤もそれだけ位に要するパルプ資源は、やうやく內地及び滿洲で自給できるやうになつたのだが、それからパルプを製造するに要する、苛性曹達や二硫化炭素や硫酸が足りない。苛性曹達不足の最大原因は工業鹽の不足であるが、之は一刻も早く北支の長芦鹽や山東鹽や海州鹽を增產すべきである。佛印にも鹽が採れるので、此地でも增產せねばならぬ。

曹達灰で硅砂を處理すれば、硝子が出來るが、その硅砂は佛印のカムラン灣邊のものが世界一で、事變前我國へも輸入してゐたが、之も大いに擴大し、種々精巧な硝子製品を、陶磁器と相並んで共榮圈へ輸出すべきである。陶磁器が稍々振はなくなつたのは、米洲向や歐洲向が杜絕した外に、石炭不足が大原因であつたが、佛印炭を大いに輸入して、遣り繰りをつければ石炭不足はやゝ免れるであらう。尙佛印のゴム〇萬瓲が、佛本國へ行かなくなつたので、我國へ來れば非常によろしい。又錫も佛印と泰との分が來れば可成り樂になる。又タングステンやアンチモニーも增產して輸入することが出來るし、植物油も我國の渴を幾許か癒すであらう。

然しそれにしても歐洲、米洲、英米系大洋洲、アフリカへの輸出が杜絕すれば、從來のわが輸出產業は、大打擊を蒙り、多數の失業者を出すであらうが、之を巧妙に、手不足の緊急產業や或は共榮圈に振り向けなければならぬ。

三

輸出產業で最大の打擊を受けるのは、製絲、紡績、罐詰業等であらう。生糸は纖維不足の折柄、且つ新富裕層が生じたので、國內向に轉換すれば、全部消化されることは可能であるが、然し最低價格の千三百五十圓を政府が維持して行く限り、富裕階級でなければ絹製品を使用できない。之を使用せしめては緊縮主義と矛盾するのは當然であるから、今年度は仕方がないとしても、來年度からはもつと安價な繭、生糸を作らしめねばならぬ。或は桑の大部分をやめて食用植物或はもつと安價な衣料植物に轉換しなければならぬかも知れぬ。價格が下落すれば農民の方で自發的に轉換するかも知れぬ。すると食糧や木炭や蔬

榮の增產に好影響を與へるかも知れぬ。

紡績工業は支那棉だけを賴りにせざるを得ず、而してそれは今年は豐作だといはれるが然し支那紡績だけの原料としても足らぬ位である。大いに增產、增集に努めねばならぬ。

纖維工業關係者は宜敷協力して、大東亞に自己產業の原料たる、新纖維資源を發見し、開發すべきである。滿洲の葦や豆稈も立派に成功した。臺灣の甘蔗稈たるバガスも今や成功せんとしつゝあり、その他バナナの皮も纖維化されつゝある。かゝる新發見、新發明、それの爲の科學的技術者及び中級・高級勞務者はいくらあつても足りないのである。今や米英の資產凍結や貿易閉塞によつて生ずべき失業者も、決して悲觀せず、勇躍新境地へ邁進すべく、政府や各產業團體も大いに之が指導に當るべきである。舊自由主義的の贅澤——「今迄の仕事でなければ嫌だ」など——を云はねば仕事は無限に存在する、或は發見されるのである。

船舶は英米航路が杜絕し、公定運賃の共榮圈航路一點張りとなれば利益は減少するかも知れぬが、此際共榮圈の資源開發に知識及び資本を以て參畫し、交流物資を增加することによつて、幾何か補ひをつけるべきであらう。

——昭和十六年七月四日稿——

世界動亂と新經濟史觀

價三圓八十錢

昭和十六年十二月五日印刷
昭和十六年十二月八日發行

著者　金子鷹之助

發行者　岡本正一
會員番號一一〇〇三一
東京市麹町區六番町六

印刷者　谷口熊之助
東京市麹町區五番町十二

印刷所　合資會社　谷口印刷所
東京市麹町區五番町十二

發行所　東京市麹町區六番町六
厚生閣
電話九段三二一八番
振替東京五九六〇〇番

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九

新體制下の商業及び商業人

慶大高等部教授　鈴木保良著

B6判 320頁
價二・〇〇〒・一四

第一編新體制下の商人　第二編小賣店　第三編卸商　第四編百貨店　國民大衆の生活必需物資の代表的配給機關たる分散組織の代表的商業形態への研究とその正しき時局的認識。

國民科學新刊

便所の進化

厚生省防疫局長　醫學博士　高野六郎著

B6判 240頁
價一・八〇〒・一四

1便所の文化的意義　2便所の科學　3便所の分類　4世界の便所　5水洗式便所　6汲取式便所　7家と便所　8便所雜聞　9便所の進化　其他（挿圖寫眞凸版二十五面挿入）

資源と經濟

東京商大教授　金子鷹之助　谷山整三　共著

B6判 316頁
價二・〇〇〒・一四

現下に於ける國家資源の問題の重要性に鑑み主要各國の重要資源を技術と經濟事情に相關せしめつつ具體的に世界經濟史の發達に結びつけて說けの名著。

經濟こぼればなし

前時事新報論說委員　生產擴充研究會調査部長　田沼征著

B列6號 310頁
價二・二〇〒・一四

經濟評論家として聲名の高い田沼征氏の近業中から國民の日常生活に關係の深い題目を隨筆的にタッチして世評の高かつたものを中心に、從來の經濟學者や論客のあまり取扱はなかつた經濟關係の人物、事柄等を通俗平易に述べたものを收錄し、終にナチス經濟の先蹤としての浪漫主義經濟學への研究を特に乞ふて一卷に纏めた新著である。通勤の朝夕、食後の小閑にひらいて興味津々、銃後國民の正しい經濟生活を指導する唯一の書である。

維新經濟史祕談　經濟ぶろむなあど（米恩・駄食と效食・食糧談議・うどんの味・舊居と新居・妬心の橫行生產擴充と生產感謝・流行語二題・商賣妙利・浮世の義理と新道德・小欲至善・時事小觀・便格談議・昔を今になすよしも）**租稅餘話**（租稅今昔記・福澤先生と地租・敗戰フランス稅制小史・中村繼男氏の事ども）**人物こぼればなし**（三人の海軍中將社長・小倉正恒論　村松胤範氏との寸談・六人の主稅局長）**ナチスの先蹤**（獨逸浪漫主義の誕生、浪漫主義の意義、浪漫主義とシュトルウム・ウント・ドランク、ノヴァーリスの國家觀、アダム・ミューラーの浪漫主義經濟學）

慶大助教授 醫學博士 林 髞著 科學論策 B6判四四〇頁 價二・五〇 送・一四

法大教授 波多野完治著 心理學的散歩 B6判三四四頁 價二・二〇 送・一四

早大教授 文學博士 西村眞次著 日本文化論考 B6判三一二頁 價二・五〇 送・一四

理學博士 牧野富太郎著 雜草三百種 三六判二八二頁 價二・八〇 送・一四

東大助教授 理學博士 本田正次著 四季と植物 B6判三九〇頁 價三・二〇 送・一四

文學博士 兼常清佐著 よもやま話 B6判四〇〇頁 價三・五〇 送・一四

三田元鍾著 切支丹傳承 B6判三六〇頁 價二・八〇 送・一四

醫學博士 竹內茂代著 一般家庭看護學 A5判四一〇頁 價三・八〇 送・二二

923
9

年 3 月 7 日

閱覽濟